李義山七律集釋稿（六）

李義山七律注釋班

＊掲載詩篇目

人日即事　531……六八三頁
春日寄懐　532……六八七頁
寫意　392……六九二頁
漢南書事　389……六九六頁
有感二首之一《附載》　269……七〇三頁
有感二首之二《附載》　270……七一四頁
重有感　271……七二四頁

＊七律の全篇を分類により排列する唐音統籤の最初の部分、寫懐類から五首を載せ、五言排律二首を附載する。統籤が明示する咏古・情詞以外の類目名は注釋班の判斷による。

＊席本李商隱詩集を底本とし、とりあげまたは引用する義山の詩には底本の排列による作品番號を記す。「李義山詩各本篇目對照表」（本誌五〇册）参照。

＊義山の文の引用は樊南文集詳註および樊南文集補編により、「文集」および「補編」と略稱する。

＊舊注をふまえるばあいも原則として注者の名をあげない。諸本の詩釋については、釋者の名をあげ、原則として全文を載せる。

＊詩釋のうち、朱鶴齡の項の「補注」は文獻(12)順治刊本各卷末附載。何焯および紀昀の項の「評本」は(13)沈氏輯評本をさす。

＊主要文獻一覽

一　無注本

(1)李商隱詩集三卷　唐詩百名家全集本（席本）
(2)李商隱詩集三卷　景印錢謙益寫校本（錢本）
(3)李義山集三卷　唐人八家詩本（毛本）
(4)全唐詩（三卷）
(5)李義山詩集三卷　四庫全書本（庫本）
(6)唐李義山詩集六卷　四部叢刊本
(7)唐音統籤（十卷）
(8)唐詩（十一卷）　藝文印書館景印本（稿本）
(9)李商隱詩集十卷補遺一卷　高麗刊本（懐德堂文庫藏）
(10)唐詩類苑二百卷

二　舊注

(11)玉溪生詩箋　錢龍惕撰
(12)李義山詩集三卷　朱鶴齡箋注（順治十七年序刊本）
(13)李義山詩集三卷　朱鶴齡箋注　沈厚燮輯評
(14)西崑發微三卷　吳喬撰
(15)義門讀書記李義山詩二卷　何焯撰
(16)李義山詩疏二卷　徐德泓・陸鳴皋撰（徐陸合解）（懷德堂文庫藏）
(17)李義山詩解不分卷　陸崑曾撰
(18)李義山詩集十六卷　姚培謙箋
(19)玉溪生詩意八卷　屈復撰
(20)重訂李義山詩集箋注三卷集外詩箋注一卷　朱鶴齡元本　程夢星刪補
(21)玉溪生詩說二卷　紀昀撰
(22)玉溪生詩詳註三卷　馮浩撰
(23)玉溪生年譜會箋四卷・李義山詩辨正　不分卷　張采田撰
(24)李義山詩偶評　黃侃撰

三　唐詩選本注釋

(25)註唐詩鼓吹十卷　郝天挺撰　廣文書局景印元刊本
(26)唐詩鼓吹註解大全八卷　廖文炳撰（內閣文庫藏）
(27)唐詩鼓吹十卷　元好問輯　郝天挺注　廖文炳解　王清臣・陸貽典參解
(28)唐才子詩甲集七言律八卷　金聖嘆撰
(29)才調集十卷　韋穀輯　馮舒・馮班評（二馮評閱本）
(30)才調集補注十卷　殷元勳箋註　宋邦綏補註
(31)唐詩貫珠六十卷　胡以梅撰

四　近代注釋

(32)李義山詩講義　森槐南
(33)李義山の無題詩　鈴木虎雄（中國文學報六册）
(34)李商隱　高橋和巳（中國詩人選集一五）
(35)李商隱表現考・斷章——豔詩を中心として——　山之內正彥（東洋文化研究所紀要四八册）
(36)The Poetry of Li Shang-yin　劉若愚
(37)李商隱詩選　安徽師範大學中文系古代文學教研組
(38)李商隱詩選　陳永正

五　その他

(39)李商隱詩索引　早稻田大學中國文學會李商隱詩索引編集班
(40)李義山文索引　京都大學人文科學研究所附屬東洋學文獻センター索引叢刊第一

人日卽事 531　　人日卽事

文王喩復今朝是　文王復を喩すは　今朝是なり
子晉吹笙此日同　子晉笙を吹くは　此の日に同じ
舜格有苗旬太遠　舜の有苗を格らしむる　旬は太だ遠く
4 周稱流火月難窮　周の流火と稱する　月は窮め難し
鏤金作勝傳荆俗　金を鏤み勝を作る　荆俗を傳え
翦綵爲人起晉風　綵を翦り人を爲る　晉風に起る
獨想道衡詩思苦　獨り想う道衡　詩思苦しきを
8 離家恨得二年中　家を離れ恨み得たり　二年中

校

0　古今歲時雜詠五・唐詩類苑一八（歲時部人日類）
1　復　叢刊本「履」
3　太　毛本「大」

韻

上平一東（同・窮・風・中）

本詩は首句不入韻、七律としては變例。義山の七律で首句不入韻は計五例。松尾良樹「李義山詩韻譜」（本誌五四册三七七頁）參照。

*

朱彝尊

以七旬七月襯出七日。何其拙也。

何焯

〔讀書記〕楊劉只學此種。○齊梁中本有此體。今變爲七言耳。

1　此句是破題。
3・4　襯出日字。

〔評本〕纖俗。○發端。自比淪落使府。庶幾此日補復。名掛朝籍。如登仙然。三四。又嘆杳邈難明也。五六。則得過且過。隨時愛景光耳。結。借玄卿人日詩句。收出放行役于外也。

陸崑曾

前半兩引七日事。正筆也。言與人日同也。一用七旬。一用七月事。翻筆也。言與人日異也。齊梁閒有此體。義山戲效之而變爲七言耳。五六因敍人日之風俗。卽滾下作結。言鏤金翦綵。從來以此日爲樂。獨有思歸之客。每悵然於雁後花前。蓋隱以道衡自況也。

姚培謙

此因人日而恨客中之難度也。文王喩復。子晉吹笙。皆七日吉祥善事。然自此以後。由七日而七旬。由七旬而七月。度日如年。正不知幾時得過耳。鏤金翦綵。家人婦子之樂。何處不有。而我今日離家之況。獨如道衡。二年中之苦恨已如此。豈堪日復一日哉。

〔讀義山詩存疑〕文王喩復今朝是。按復卦彖辭。七日來復。本謂自姤至復。經歷七月。變月言日者。欲其陽之速至也。五月夏至一陰始生爲姤。六月二陰爲遯。七月三陰爲否。八月四陰爲觀。九月五陰爲剝。十月純陽爲坤。冬至一陽初生爲復。按之易理甚明。義山以七日爲人日引據。殊失經旨。乃知詩人專尙辭華。故於經學功淺耳。

屈復

此首乃獺祭之最下者。

紀昀

〔詩說下〕何以不取人日卽事也。曰。前四句一字不通。五六亦堆垛無味。七八雖成語。亦無佳處。

〔評本〕前四句用經悖謬。後半堆砌不成語。

馮浩

何曰。齊梁中有此體。今變爲七言耳。浩曰。題曰卽事。通體層疊。注到離恨。是在江鄉寓慨也。然自成一格。微近香山。本集若此輕俊取勢者絕少。惟和韋潘七月十二日詩472略似耳。玩結聯。或他人見贈之作乎。類列於此。與柳詩499皆可疑也。

1　易。七日來復。王注孔疏。取六日七分之義。擧成數言。故曰七日也。變月言日。乃褚氏莊氏之說。疏中駁去之。姚氏譏義山疎於經學。反誤矣。

4　姚曰。恨客中難度。由七日而七句而七月。正不知幾時得過。按。頗善爲說。豈其然乎。

張采田

〔辨正〕詩亦不惡。然非玉溪手筆。馮氏疑之。是也。

〔會箋〕此（柳江南江北）與人日詩。皆不似義山毛筆。不必曲解。

*　*

0　〔荆楚歲時記〕正月七日爲人日。以七種菜爲羹。翦綵爲人。或鏤金箔爲人。以貼屏風。亦戴之頭鬢。又造華勝相遺。登高賦詩

（杜公瞻注　按董勛問禮俗曰。正月一日爲雞。二日爲狗。三日爲羊。四日爲猪。五日爲牛。六日爲馬。七日爲人。…劉臻妻陳氏進見儀曰。七日。上人勝於人。…華勝起於晉代。見賈充李夫人典戒。云。像瑞圖金勝之形。…春日登臨。從古爲適。但爲七日。竟不知起於何代。桓溫參軍張望。亦有正月七日登高詩）。なお守屋・布目・中村譯注「荆楚歲時記」（平凡社東洋文庫）參照。

人日の詩で義山がふまえる作は〔薛道衡人日思歸詩〕入春纔七日。離家已二年。人歸落雁後。思發在花前（藝文類聚四）。また歲時雜詠には義山の本詩をふくめ四一首の唐詩を載せるが、下掲の作は標題がやや類似する。〔杜甫人日言懷詩〕此日此時人共得。一談一笑俗相看。杯中柏葉休隨酒。勝裏金花巧耐寒。佩劍衝星聊暫拔。匣琴流水自須彈。早春重引江湖興。直道無憂行路難。ただし宋本杜工部集の標題は單に「人日兩篇（之二）」。

卽事　〔陶淵明癸卯歲始春懷古田舍詩〕雖未量歲功。卽事多所欣。詩題としては、白樂天に〔卽事〕見月連宵坐。聞風盡日眠。の五律、〔早春卽事〕の五排などがある。

1　〔杜甫九日請人集于林詩〕九日明朝是。相要舊俗非。

文王　〔文選四一司馬遷報任少卿書〕蓋文王拘而演周易（李注周易曰。易之興也。當文王與紂之事邪。…史記本紀曰。…紂乃囚西伯於羑里。西伯演易之八卦爲六十四）。仲尼厄而作春秋。

喩　〔韓詩外傳三〕當舜之時。有苗不服。禹請伐之。而舜不許曰。吾喩敎猶未竭也。久喩敎而有苗民請服。

復　〔易復彖傳〕七日來復（王注　陽氣始剝盡。至來復時凡七日。〈孔疏〉陽氣始剝盡。謂陽氣始於剝盡之後。至陽氣來復時。凡經七日。觀注之意。陽氣從剝盡之後。至於反復。凡經七日。其注分明。如褚氏莊氏。並云。五月一陰生。至十一月一陽生。凡七

月。而云七日。不云月者。欲見陽長須速。故變月言日。今輔嗣云剝盡至來復。是從盡至來復。經七日也。若從五月言之。何得云始盡也。又臨卦亦是陽長。而言八月。今復卦亦是陽長。何以獨變月而稱七月。觀注之意。必謂不然。亦用易緯六日七分之義。同鄭康成之說。但於文省略。不復具言)。

今朝　文字通りけさ、でなく今日の意味になることがある。〔庾信奉和賜曹美人詩〕何年迎弄玉。今朝得夢蘭。〔白樂天題郡中荔枝詩十八韻〕早歲曾聞說。今朝始摘嘗。〔又與諸道者同遊二室至龍澤作〕他日終爲獨往客。今朝未是自由身。など白詩に頻見。義山の〔昨日369〕今朝青鳥使來賒もしかり。本釋稿(二)本誌五四册四三三頁。

2　**子晉吹笙**　〔列仙傳〕王子喬者。周靈王太子也。好吹笙作鳳凰鳴。遊伊洛之閒。道士浮丘公接以上嵩山三十餘年。後求之於山。見桓良曰。告我家七月七日待我於緱氏山頭。果乘白鶴駐山頭。〔古詩十九首之十五〕仙人王子喬。難可與等期(李注　列仙傳曰、王子喬者。太子晉也。道人浮丘公接以上嵩高山)。〔杜牧寄題甘露寺北軒詩〕孤高堪弄桓伊笛。縹緲宜聞子晉笙。

此日　〔杜甫九日登梓州城詩〕兵戈與關塞。此日意無窮。

3　**舜格有苗**　〔書大禹謨〕帝曰。咨禹。惟時有苗弗率。汝徂征。…三旬苗民逆命(孔傳　旬。十日也。以師臨之。一月不服)。…禹…班師振旅(孔傳　遂還師。兵入曰振旅)。帝乃誕敷文德。舞干羽于兩階。七旬有苗格(孔傳　討而不服。不討自來)。〔文選四四鍾會檄蜀文〕王者之師。有征無戰。故虞舜舞干戚而服有苗。周武有散財發廩表閭之義。

4　**周稱流火**　〔詩豳風七月〕七月。陳王業也。周公遭變。故陳后稷先公風化之所由。至王業之艱難也。○七月流火。九月授衣(毛傳火。大火也。流。下也)。〔文選一三潘岳秋興賦〕聽離鴻之晨吟。望流火之餘景。

難窮　〔顏延之除弟服詩〕徂沒離二秋。掩泣備三冬。往辰緬難紀。來算忽易窮。

5・6　〔漢書二八地理志下〕凡民函五常之性。而其剛柔緩急。音聲不同。繫水土之風氣。故謂之風。好惡取舍。動靜亡常。隨君上之情欲。故謂之俗。孔子曰。移風易俗。莫善於樂(師古曰。孝經載孔子之言)。

5　**荆俗**　〔元稹送崔侍御之嶺南二十韻〕荆俗欺王粲。吾生問季咸。

6　**晉風**　〔宋之問禊飲序〕漢庭故事。衣冠就立灞之橋。晉國遺風。輜軿耀翠嬀之浦。〔李白古風之五十四〕晉風日已頹。窮途方慟哭。

7　**獨想**　やや似た表現に、〔王維送崔三往密州覲省詩〕同懷扇枕戀。獨念倚門愁。

道衡　薛道衡(五四〇－六〇九)、字は玄卿の集はもと七十卷あったというが(隋書五七本傳)、現存の作は詩二一篇・文八篇のみ。しかし當代の名手ではあり、義山も敬意を拂っていたようである。〔文集四謝河東公和詩啓〕某曾讀隋書。見楊越公。地處親賢。才兼文武。每舒錦繡。必播管絃。當時與之握手言情。披襟

得侶者。惟薛道衡一人而已（馮注　隋書薛道衡傳。道衡。河東汾陰人。每至構文。必隱坐空齋。蹶壁而臥。聞戸外有人便怒。其沈思如此。道衡久當樞要。才名益顯。高熲楊素。雅相推重。聲名籍甚。無競一時）。

詩思苦　〔杜甫暮登四安寺鐘樓寄裴十詩〕知君苦思緣詩瘦。大向交遊萬事備。〔韋應物休假日訪王侍御不遇詩〕怪來詩思清人骨。門對寒流雪滿山。〔孟郊會合聯句〕劍心知未謝。詩思猶孤聳。〔白居易閒詠詩〕早年詩思苦。歲晚道情深。

8　〔隋書五七薛道衡傳〕仁壽中。…出檢校襄州總管。道衡久蒙驅策。一旦違離。不勝悲戀。言之哽咽。

離家　〔楚辭九辯〕去鄉離家兮徠遠客。超逍遙兮乎焉薄。〔溫庭筠過新豐詩〕至今留得離家恨。雞犬相聞落照明。

＊　＊　＊

0　何焯が1句について「此句是破題」と注記するのは、人日と直接には關わりのない典故を冒頭に置くのがやや唐突の感を與えるせいか。また本作品の標題自體も、韓翃舍人卽事82の場合と同じく些か坐りが惡いようにも思える。たとえば次の張籍の詩題などは義山に比べていかにも親切である。「春日李舍人宅見兩省諸公唱和因書卽事」。

舊解は、朱彝尊はじめ何焯・屈復・紀昀が酷評、それに對して陸崑曾・姚培謙・馮浩・張采田はより評價が高い。ただ、前者が「纖俗」といい後者が「輕俊」というように、義山七律の典型たる重厚絢爛からは遠いが、馮氏張氏がそこで早速に、義山の作に非ずと何の根據もなしに疑うのはどうしてか。義山は天才であり、しかもその才能はキリモミ型・カミソリ型ではなく、何でもござれバッサバッサの大ナタ型なのだから。

1　周の文王が易經において、七日で一陽來復するのは陰陽消長の周期と教え諭された復の卦、今日は人日、正月七日、今日こそその復の卦が實現、すべての不運も終りを告げる。七日來復の解釋について、姚培謙が義山の經學を云々したのは、馮浩の說く通り當らず、逆に姚氏の注疏の學へのうとさを示すことになった。句意を何焯は重くとり、朝官への復歸にかけるとする。復の字、叢刊本のみ「履」に誤まる。同系の二本、稿本および類苑は誤まらず。

2　好んで笙を吹いて遊んだ子晉すなわち仙人王子喬が、豫告通り白い鶴に乘ってあらわれたのも同じこの日、七日なのだ。

1・2句ともに、七日についての「吉祥善事」（姚培謙）で、しかし細かくいえば「用經悖謬」（紀昀）ともなる。ともあれ作品全體のできばえが、逆にそのいずれをよしとするかの決め手となろう。

3・4　舜が有苗の民を武力でなく氣長に待って德の力で以て朝に來らしめた、その間は七旬、七十日とはあまりに遠く先のこと。周公が流火とよんだ、その月、七月まではまだ果しなく長く思える。七カ月というのは長い長い、それほど先の事は到底分らぬ。七日、七旬、七月と期待から失意落膽へ心境が變じて行く。この邊は姚培謙の說がよく、「覩出日字」とまたしても七日を讀みこ

もうとする何焯には無理がある。

5・6　今も人々が金箔を使って髪飾りを作るのは（荆楚歳時記にいう）荆の地の習俗をそのまま傳えており、あやぎぬを切ってふだを作るのは（同じく歳時記にいう）晉代の風俗に由來するものだ。勝は華勝、人は人勝、それぞれ全く別物だが（東洋文庫本四六ページ）、詩人の意識ではそこまで嚴密に區別していたかどうか。あるいは人と勝とを上下句に對させてみただけかもしれない。人勝あるいは華勝、いずれにせよ人日の風物ではあるが、この日を歌った先行の諸作にあまり例を見ぬ「荆俗ヲ傳ウ」の表現は、作者が當時その荆の地に止まっていたゆえともとれるので、「江鄉に在るとき慨を寓せしなり」という馮浩の說には一定の信憑性がみとめられよう。6句「起晉風」は晉風ヲ起スとも讀めるが、歳時記の杜注「華勝起於晉代」をふまえるとみたい。

7・8　いかにも樂しげな人日の賑いのなかで、ひとり（わたしには）あの薛道衡が「人日に歸るを思う」詩を作った苦しみがまざまざと思い起される、家を離れ故鄉を離れてから二年もの恨めしさを。「詩思苦」は、恨みつらみの思いをこめた苦しみの詩を意味するとともに、道衡のようなすぐれた詩人ならではの詩作の苦しみ卽ち苦吟をも暗示する。

陸崑曾・姚培謙はもっぱら離家思歸の悲しみと解するが、何焯はさらに朝官復歸願望を重ね、そこまで讀みこみうる可能性もある。義山の七律では二月二日100が似通った雰圍氣を持つ。本稿㈢本誌五六册二九四頁參照。作者の傳記と結びつける手がかりがいくらかでもありそうな本作品について、馮浩・張采田・安徽師大本年表がいずれもあえて編年していないのは、むしろ奇異の感を抱かせられる。

（森瀨壽三）

春日寄懷532　　春日懷を寄す

世間榮落重逡巡　世間の榮落　重だ逡巡
我獨丘園坐四春　我獨り丘園に　四春坐す
縱使有花兼有月　縱使い花有り　兼ねて月有るとも
4可堪無酒又無人　堪う可けんや酒無く　又人無きに
青袍似草年年定　青袍は草の似く　年年定なり
白髮如糸日日新　白髮は糸の如く　日日新なり
欲逐風波千萬里　逐わんと欲す風波　千萬里
8未知何路到龍津　未だ知らず何の路か龍津に到る

校

0　唐詩鼓吹七・唐詩類苑一二四（人部述懷類）
4　又　高麗本・鼓吹「更」

韻

上平十七眞（人・新・津）十八諄（巡・春）同用

＊

朱彝尊

5　定字奇。

8　名龍門。

何焯

〔讀書記〕

8　陳後主詩。岸草發青龍（評本「龍」を「袍」に作る）。

〔評本〕

1　漢書敍傳。逡巡致仕。

徐德泓

清空如話。已爲宋元人啓徑。

陸崑曾

此義山退居太原時。嘆老嗟卑之作也。言榮落之際。世人所逡巡而不能忘情者。我豈樂此閒居。而獨坐丘園。至四年之久耶。夫丘園中非無花晨月夕。而無酒無人。誰其堪此。青袍似草。言纓簪之絕望也。白髮如糸。言血氣之漸衰也。結言我非忘世之人。但風波萬里。未識何途之從。而得致要津也。本傳。茂元卒。來遊京師。久之不調。此詩應作於會昌五六年閒。

姚培謙

此歎汲引之無人也。榮落之感。世人何日能忘。不謂我之一坐。已是四年。縱使不以聲利縈懷。而對花對月。如此無酒無人之恨。何況青袍不改。白髮添新。非敢憚風波而甘邱壑也。仕路無媒。惟有撫時而自歎耳。

屈復

一二寄懷之由。三四懷。五景。六情。結自傷欲出而無路也。

程夢星

此爲大中元年作。義山自會昌四年移居永樂。至此凡四年也。此後遂出應鄭亞之辟矣。

紀昀

〔詩說下〕何以不取春日寄懷也。曰。不免淺率。

〔評本〕亦是滑調。

馮浩

2　當至會昌六年矣。

3・4　袁（彪）曰。無酒無人。反不如併花月而去之。二語沈痛。

張采田

〔辨正〕此詩極有情致。豈是油滑一派。大抵紀氏論詩。專以好惡爲是非。未免有意吹索。皆非公論。

〔會箋〕義山會昌元年丁母憂。至是閒居已四年矣。故曰我獨邱園坐四春也。馮編於會昌六年。非是。

廖文炳

此詩自嘆未致用也。首言人在世閒。如物有榮枯。重在逡巡頃刻之閒。落當不久而又榮耳。何我久于丘園。處此窮約。縱使有花有月。可以遊賞。豈能堪此無酒無人。其何以賞之哉。無人言無知己也。噫。青袍未換。白髮屢生。欲逐風波而上龍門。未期何日可到。久落未榮。寧不重吾愁哉。

0　乃寫懷也。

王清臣・陸貽典

首言人在世閒。如物有榮枯。重在逡巡頃刻之閒。落未久而又榮耳。獨我久於丘園。處此窮約。縱使有花有月。可以遊賞。其能堪此無

酒無人哉。嗟嗟。青袍未換。白髮叢生。欲逐風波而上龍門。未期何日可到。此所以重感於世間之榮落耳。

近代注釋

〔森槐南〕中卷五六七頁。〔高橋和巳〕八三頁。

*

0　類似の詩題として比較的早いのは、〔陳書三二謝貞傳〕八歲。嘗爲春日閑居五言詩。從舅尚書王筠奇其有佳致。謂所親曰。此兒方可大成。至如風定花猶落。乃追步惠蓮矣。また李白には次の二例がある。〔春日歸山寄孟六浩然〕〔春日獨坐寄鄭明府〕。

春日　〔詩豳風七月〕春日載陽。有鳴倉庚。…春日遲遲。采蘩祁祁。唐詩では、〔杜甫春日江村詩〕異時懷二子。春日復含情。また張籍には正しく春日閑居を歌う〔春日行〕の七古がある。

寄懷　〔陶淵明九日閒居詩序〕余閒居。愛重九之名。秋菊盈園。而持醪靡由。空服九華。寄懷于言。〔宋書五二謝述傳〕太祖與義康書曰。…汝始親庶務。而任重事殷。宜寄懷羣賢。以盡弼諧之美。〔許渾晨起二首之二〕清鏡曉看髮。素琴秋寄懷。許渾の詩でも懷を寄せる相手は素琴だろうし、この語を漠然と對象を明示せずに用いるのは些か異例で、一應は廖文炳が注する通り「寫懷」と解するしかないようだが、しかし寫懷ないし詠懷とは本來意義を異にするはずだ。同型の詩題としては沈約に「休沐寄懷」があり、また義山より後れるが、「寄懷」と言い放した例が、秦韜玉の七律に一首ある。

1　**世間**　〔文選一六江淹別賦〕惟世間兮重別。謝主人兮依然。〔杜甫後出塞詩〕男兒生世間。及壯當封侯。

榮落　〔徐勉答客喩〕僕聞古往今來。理運之常數。春榮秋落。氣象之定期。人居其閒。譬諸逆旅。〔宋之問太平公主山池賦〕春秋寒暑兮歲榮落。林巒沼沚兮日芳鮮。〔白居易早夏遊宴詩〕榮落逐瞬遷。炎涼隨刻變。義山にまた〔槿花372〕風露淒淒秋景繁。可憐榮落在朝昏。

重　助字辨略四去聲に戰國策注を引き「重。猶甚也」という訓を載せ、張相匯釋二には張九齡以下唐詩における用例が多く引かれる。

逡巡　張相匯釋五に、杜詩・白詩などのほか本詩をふくめ義山の三作をいずれも例に引き、「頃刻」と釋するのに從うべきである。こうした例は變文その他にも頻見する、蔣禮鴻の敦煌變文字義通釋五篇參照。なお周一良によれば、この手の用例で最も早いのは吳志一八吳范傳かとされる、「鈴下曰諾。乃排閤入。言未卒。(孫)權大怒。欲便投以戟。逡巡走出」(文史九輯《三國志》札記)

2　〔盧照鄰春晚山莊率題二首之二〕田家無四鄰。獨坐一園春。

丘園　〔易賁〕六五。賁于丘園。束帛戔戔。吝。終吉。〔文選二〇謝靈運九日從宋公戲馬臺集送孔令詩〕彼美丘園道。喟焉傷薄劣。(李注　易曰。六五。賁于丘園。束帛戔戔。王肅曰。失位無應。隱處丘園)。その他文選にすべて十例。唐詩では、〔孟浩然田園作〕粤余任推遷。三十猶未遇。書劍時將晚。丘園日已暮。義山の文に、〔文集六重祭外舅司徒公文〕愚方遁跡丘園。游心墳素。

四春　〔白居易答尉遲少監水閣重宴詩〕雞黍重廻千里駕。林園暗換四年春。四秋ならば、〔竇鞏奉使薊門詩〕自從身屬富人侯。蟬噪槐花已四秋。

3・4　〔盧綸贈別司空曙詩〕有月曾同賞。無秋不共悲。如何與君別。又是菊花時。〔白居易寄明州于駙馬使君三首之一〕有花有酒有笙歌。其奈難逢親故何。

3　**縱使**　〔杜甫戲爲六絶之三〕縱使盧王操翰墨。劣於漢魏近風騷。

4　〔漢書八七揚雄傳下〕雄以病免。復召爲大夫。家素貧。耆酒。人希至其門。時有好事者。載酒肴從游學。

可堪　〔陸暢詠簾詩〕玉漏報來過夜半。可堪潘岳立踟躕。

無酒　〔詩邶風柏舟〕微我無酒。以敖以遊（毛傳　非我無酒。可以敖遊忘憂也）。〔宋書九三陶潛傳〕嘗九月九日無酒。出宅邊菊叢中坐久。値（王）弘送酒至。卽便就酌。醉而後歸。

5・6　〔庾信哀江南賦〕青袍如草。白馬如練。

5　**青袍**　〔天平公坐中509〕青袍御史注參照、本稿(五)本誌五八册六八二頁。なお、うだつのあがらぬ最下級の官僚たることを示す唐詩の用例として、〔高適使青夷軍入居庸詩三首之三〕自堪成白首。何事一青袍。〔白居易約心詩〕黑鬢糸雪侵。青袍塵土涴。

年年　〔劉廷芝代悲白頭翁詩〕年年歲歲花相似。歲歲年年人不同。

6　**白髮如糸**　〔駱賓王疇昔篇〕不應白髮頓成糸。直爲黃沙暗如漆。

日日新　〔禮記大學〕湯之盤銘曰。苟日新。日日新。又日新。

7　**風波**　〔楚辭九章哀郢〕順風波以從流兮。焉洋洋而爲客。〔又九歎遠逝〕水波遠以冥冥兮。眇不睹其東西。順風波以南北兮。霧宵晦以紛紛。日杳杳以西頹兮。路長遠而窘迫。〔文選一二郭璞江賦〕傲自足於一嘔。尋風波以窮年（李注　楚辭曰。順風波以南北兮）。

千萬里　〔孟郊下第東歸留別長安知己詩〕一片兩片雲。千里萬里身。

8　**何路**　〔杜甫重過何氏五首之五〕何路霑微祿。歸山買薄田。

龍津　すなわち龍門。〔後漢書黨錮李膺傳〕是時朝庭日亂。綱紀穨阤。膺獨持風裁。以聲名自高。士有被其容接者。名爲登龍門（李賢注　辛氏三秦記曰。河津一名龍門。水險不通。魚鼈之屬莫能上。江海大魚。薄集龍門不數千。不得上。上則爲龍也）。〔晉書五六孫綽傳〕嘗鄙山濤而謂人曰。山濤吾所不解。吏非吏。隱非隱。若以元禮門爲龍津。則當點額暴鱗矣。〔弘執恭和平涼公觀趙郡王妓詩〕齊竽不可廁。空願上龍津。〔鮑溶寄張十七校書李仁行秀才詩〕一與淸風上芸閣。再期秋雨過龍津。

＊　＊　＊

義山が母の喪に服していた、いわゆる永樂閑居時代の作で、張采田は會昌五年（八四五）に係ける。高橋和巳および安徽師大年表おなじ。母の死は會昌二年とされるので、この場合は四春が足かけ四年になる。馮浩は會昌六年に係けるが、張氏によれば、五年十月に服闋、重ねて祕書省正字に任ぜられており、馮氏の編年

はありえぬこととなる。程夢星の編年（大中元年）は問題にならない。

1　世上の榮枯盛衰は全くあっというまのこと、榮も一瞬なれば落も一瞬だ。義山の槿花の詩とほぼ句意はおなじ。白樂天の早夏遊宴の詩のように逐瞬遷とあれば、めまぐるしく變化する意だが、ここではそこまで踏みこめるかどうか。いずれにせよ榮と落ないし榮から落へのはかなさをいうにはちがいあるまい。高橋は重逡巡を重ネテ逡巡と讀み、「ぐるぐる堂堂めぐりして進展しない」と釋するが當らぬ。

2　わたしはひとり、もろもろの世の營みとは沒交渉に田園に引っこみ、隱遁の生活は四年目の春を迎えた。丘園はもとより隱遁生活の場としての田園をさす。

3・4　ここ丘園には美しい花もありおまけにすばらしい月もあるが、たとえそうした自然の風物が存在したところで、訪れる人もなくそして携えて來てくれる酒もなしにどうして我慢できようか。丘園と世間とに對する胸の中がここで初めて明かされる。4句は恐らく揚雄と淵明の典故を用いたか。3句にもあるいは何か基く故事があるか。

5　官として最下級の我が青の制服は、毎年きまって生えてくる青草のように、年ごとに定着してしまう。次の年には變るかとの期待空しくまた青に落ちつく。朱彝尊は定字奇と評したが、この定の字は〔碧城三首之一151〕若是曉珠明又定（本稿(二)本誌五四册三九二頁）の定と同じく奇警難解である。定着と釋したのは一應の解にすぎず、實際はさらに複雑な含意がありそうだ。なお高橋譯では「身についたものとなってゆく」。

6　それにひきかえ我が白髮は、絹の糸が次から次と紡ぎ出されるように、日ごと日ごと新しい一すじがふえてゆく。青袍が定なるに對し、日日新なるはただ白髮のみというアイロニカルな比喩。

7・8　こうしていても仕方がない。わたしは風波――世間の荒波にあえて身を投じ、千里だろうが萬里だろうが泳ぎ拔いてみたい。果してどこをどう行ったならば、かの龍津――登龍門にたどりつけるかは分らないのだが。

一見して明らかな、中年にさしかかった義山のあせりをのべる「清空如話」の作。從って舊釋に說の分岐はなく、ただ逡巡の語を含む1句は廖文炳のみが正しく解する。永樂閑居の諸作には、いかにも白樂天風の、見透しのよすぎる詩が多い。だからといって義山の手筆たることを否定するなどは論外だが、高橋のようにこの時期に限っての詩風の變化ととるのも直ちには同意しかねる。義山と白氏との因緣は存外深いのだから。〔補編七與白秀才狀〕伏思大和之初。便獲通刺。昇堂辱顧。前席交談。顧學頡が義山と樂天の出會を大和三年とする（中華書局本白居易集第四册一六二一頁）のも、右の白秀才景受に與えた狀を根據としているはずだ。義山は若年からつとに樂天を敬愛していたのである。

（深澤一幸）

寫意392　寫意

燕雁迢迢隔上林　燕雁迢迢として　上林を隔て
高秋望斷正長吟　高秋望斷　正に長吟
人間路有潼江險　人間　路には有り　潼江の險
4天外山唯玉壘深　天外　山は唯　玉壘深し
日向花間留返照　日は花間に向て　返照を留め
雲從城上結層陰　雲は城上より　層陰を結ぶ
三年已制思鄉淚　三年已に制す　鄉を思う淚
8更入新年恐不禁　更に新年に入らば　恐らくは禁えざらん

校

0　唐詩品彙八八・唐詩類苑一一六（人部羈旅類）・詩學禁臠
3　有　詩學禁臠「止」
4　外　毛本・金聖嘆本・禁臠「上」
5　日向　唐詩品彙「殘日」
　返　何焯本「晚」　禁臠「遠」
6　雲從　品彙「片雲」
7　思鄉　禁臠「相思」
8　年恐　禁臠「愁却」

韻

下平二十一侵（林・吟・深・陰・禁）

＊

吳喬

溫飛卿以玉跳脫對金步搖。宣宗有意拔擢。絢沮抑之。意者。義山此事故第三聯云然乎。絢之忌才。無往極也。

朱彝尊

3・4　不言而神傷。

何焯

〔讀書記〕

1　伏思鄉。
3・4　正披寫其不思鄉而不可得之故（評本「中二聯正披寫……」に作る）。
5　朱晦翁云。西北邊多陰。蓋日到彼方午。則彼已甚晚。不久則西落。故西邊不甚見日。元稹通州酬白居易詩有州斜日易晡。未酉卽桑榆之句（評本「元稹…之句」を「落句卽老杜所謂叢菊兩開他日淚也」に作る）。
7・8　一路逼出此二句。

〔評本〕

1　迢迢二字。生於三四。
3・4　接上吟字。眞有莊舄之感也。
5　幾於戴盆望天矣。
8　新愁謂秋悲也。

陸鳴皋

此從事蜀幕而思還之作也。第五六句。猶有望恩意而仍嘆不能。非泛然寫景。

陸崑曾

義山在東川最久。詩亦最多。二月二日100一篇云。三年從事亞夫營。

此云三年已制思鄉淚。二詩乃一年中先後所作也。越二年罷廢寄同舍365有五年從事霍嫖姚之句。從此遂還鄭州矣。題曰寫意。寫思鄉之意也。上半言故鄉迢遞。山川閒之。且蜀道之難。水陸皆成險阻。能不爲之長吟遠望其際乎。日向花閒留返照。譬餘光之無幾也。雲從城上結層陰。喩愁抱之不開也。結言思鄉有淚。强制已久。豈能更禁於三年後耶。按此詩。作於大中十一二年閒。義山年近六十矣。

姚培謙

此義山自傷其留滯於東川也。憶自高秋別家至此。無往非長吟遠望之時。遂覺人閒天外。除潼江玉壘。再無更深更險於此境者。今來此已經三年。花閒晚照。城上輕陰。又入新年景況。而歸期正未卜也。一吟淚流。恐有不能自禁者矣。

程夢星

此東川佐幕。回思長安之作。

紀昀

〔詩說上〕潼江玉壘。豈必獨險獨深。意中覺其如是耳。○結恐太直。故作態收之。此亦躲閃之法也（評本「故作…法也」を「故縈拂一層。攙進一步收之。此新年乃未來之新年。或泥此二字。欲改高秋爲高樓。失其旨矣」に作る）。

馮浩

浩曰。黯然神傷。情味獨絕。又曰。甚似前遊巴蜀時所作。擬編北禽五律52之下。惟三年字。更不比夜飲431之江海三年客可通融也。故不得已編此。爲撫今追昔之慨。

3・4　渡梓潼江。又渡涪江。乃次梓州也。玉壘山在成都。此遡昔年至巴蜀途次曾身親此江流之險。亦暗寓人心險於山川也。西川終無屬望。如山最深。不得入矣。此之謂寫意。

5　遲暮之悲。

6　羈愁之痛。

金聖嘆

前解。言只望一寄書人尙自不得。安望乃有歸家之日耶。所謂潼江之險。玉壘之深。一墮其閒。便成井底也。

後解。寫一年又有一年。一月又有一月。只今一日又有一日。如此返照雖留。暮雲已結。眞爲更無法處者也。設果一日又有一日。一月又有一月。因而一年眞又有一年。則我且欲失聲竟哭也。

范梈

兩句立意格　初聯。上句起第二句。第二句起頸聯。蓋頷聯是應第一句。頸聯是應第二句。結尾是總結上六句。思之切。慮之深。得乎性情之正也。

近代注釋

〔陳永正〕八二頁。

＊　＊

0　**寫意**　全唐詩を通覽しても同一の詩題は見えない。類似例ならば、杜甫に寫懷二首、李益に寫情一首がある。

〔戰國策一九趙策三〕人有言子者。曰。父之孝子。君之忠臣也。故寡人以子之智慮。爲辨足以道人。危足以持難。忠可以寫意。信可以遠期（鮑注　寫猶宣也）。〔文選一八馬融長笛賦〕是故可以通

靈感物。寫神喻意（李注　可以通於神靈。感致萬物。舒寫精神。曉喻志意也）。〔釋名釋言語〕嗚。舒也。氣憤懣。故發此聲。以舒寫之也。〔李白扶風豪士歌〕原嘗春陵六國時。開心寫意君所知。

寫意は自らの内なる意を外にのべて發散させる義。

1 **燕雁**　〔李白臨江王節士歌〕洞庭白波木葉稀。燕雁始入吳雲飛。〔杜牧題池州弄水亭詩〕檻前燕雁棲。枕上巴帆去。北國の雁、特に南方に飛來する時。義山の他の二例、〔贈劉司戶蕢21〕已斷燕鴻初起勢。〔今月二日…輒復五言四十韻563〕裂帛待燕鴻。もおなじ。

迢迢　〔古詩十九首之十〕迢迢牽牛星。皎皎河漢女（呂延濟注迢迢。遠貌）。〔杜甫苦兩詩〕悄悄素滏路。迢迢天漢東。

隔　義山詩からやや相通ずるかと思われる例を拾うならば、〔宿駱氏亭寄懷崔雍崔衮60〕竹塢無塵水檻清。相思迢遞隔重城。〔臨發崇讓宅紫薇252〕桃綬含情依露井。柳綿相憶隔章臺。

上林　〔漢書五四蘇武傳〕昭帝卽位。數年。匈奴與漢和親。漢求武等。匈奴詭言武死。後漢使復至匈奴。常惠請其守者與俱。得夜見漢使。具自陳道。敎使者謂單于。言天子射上林中。得雁。足有係帛書。言武等在某澤中。使者大喜。如惠語以讓單于。單于視左右而驚。謝漢使曰。武等實在。〔何遜學古三首之三〕欲因上林雁。一見平陵桐。〔孟浩然自潯陽泛舟經明海詩〕魏闕心恒在。金門詔不忘。遙憐上林雁。氷泮也回翔。

2 **高秋**　〔玉臺新詠一宋子侯董嬌饒詩〕高秋八九月。白露變爲霜。〔沈約休沐寄懷詩〕臨池清溽暑。開幌望高秋。

望斷　〔蕭道成塞客吟〕青關望斷。白日西斜。恬源靚霧。壟首暉霞（南齊書二八蘇侃傳）。〔駱賓王冬日野望詩〕三江歸望斷。千里故鄉遙。〔孟浩然田園作〕望斷金馬門。勞歌采樵路。義山にまた〔曲江493〕望斷平時翠輦過。空聞子夜鬼悲歌。〔卽日298〕望賒珠易斷。恨久欲難收。張相匯釋三斷條に「望斷。猶云望盡或望煞」という。

長吟　〔楚辭九歎離世〕立江界而長吟兮。愁哀哀而累息（王注言己還入大江之界。遠望長吟。心中悲歎而太息。哀不遇也）。〔文選二九曹植雜詩六首之一〕孤雁飛南遊。過庭長哀吟。〔杜甫江亭詩〕坦腹江亭暖。長吟野望時。義山にまた〔梓州罷吟寄同舍365〕長吟遠下燕臺去。唯有衣香染未銷。

3 **路有**　〔文選二三王粲七哀詩二首之一〕路有飢婦人。抱子棄草間。〔杜甫自京赴奉先縣詠懷五百字〕朱門酒肉臭。路有凍死骨。

潼江險　潼水すなわち梓潼水の急流をさす。〔文集四爲崔從事福寄尙書彭城公啓〕潼水千波。巴山萬嶂。接漏天之霧雨。隔嶓冢之煙霜。〔元和郡縣志三三劍南道下梓州〕射洪縣有梓潼水。與涪江合流。急如箭奔射涪江口。蜀人謂水口曰洪。因名射洪。〔馮浩注〕漢書（二八上）地理志。廣漢郡梓潼縣。五婦山。馳水所出。南入涪。應劭曰。潼水所出。南入墊江。…水經注（三二）。馳水。一名王婦水。亦曰潼水也。〔嘉慶四川通志一八潼川府三台縣〕梓潼水。在縣東二十里。卽大瀰江。自劍州馬閣山發源。歷梓潼。過鹽亭。流入縣界。入涪江。一名射江。なお咸豐重修梓潼縣志卷一・圖によれば、縣治の眞北の江邊に送險亭なる建物が見える。

〔文選三九枚乘上書重諫吳王〕深壁高壘。副以關城。不如江淮之險。〔又二六任昉贈郭桐廬詩〕滄江路窮此。湍險方自茲。〔殷堯藩金陵上李公垂侍御詩〕六朝空據長江險。一統今歸聖代尊。

4 **天外** 〔文選八揚雄羽獵賦〕泰華爲旒。熊耳爲綴。木朴山還。漫若天外（李注　宋玉大言賦曰。長劍耿介倚天外）。〔杜甫石笋行〕安得壯士擲天外。使人不疑見本根。

山深 〔史記一二九貨殖列傳〕太史公曰。…淵深而魚生之。山深而獸往之。

玉壘 〔漢書二八地理志上〕蜀郡。…縣十五。…緜虒（原注　玉壘山。湔水所出。東南至江陽入江）。〔文選四左思蜀都賦〕夫蜀都者。蓋兆基於上世。開國於中古。廓靈關以爲門。包玉壘而爲宇（劉淵林注　靈關。山名。在成都西南漢壽界。在前。故曰門也。玉壘。山名也。湔水出焉。在成都西北岷山界。在後。故曰宇也）。〔李白上皇西巡南京歌十首之四〕地轉錦江成渭水。天廻玉壘作長安。〔杜甫寄杜位詩〕玉壘題書心緒亂。何時更得曲江邊。〔嘉慶四川通志一〇成都府灌縣〕玉壘山。在縣西北。

5 **花間** 〔玉臺新詠六劉令嫻答外詩二首之一〕鳴鸝葉中響。戲蝶花間鶩。〔岑參送崔員外入秦因訪故園詩〕竹裏巴山道。花間漢水源。

返照 〔纂要〕日西落。光反照於東。謂之反景（初學記一）。〔孟浩然宿終南翠微寺詩〕翠微終南裏。雨後宜返照。〔杜甫返照詩〕返照入江翻石壁。歸雲擁樹失山村。

6 〔文選二八劉琨扶風歌〕浮雲爲我結。歸鳥爲我旋（李注　漢書。息夫躬絕命辭曰。秋風爲我吟。浮雲爲我結）。

城上 〔玉臺新詠九漢桓帝時童謠歌二首之二〕城上烏。尾畢逋。〔岑參臨河客舍詩〕城上望鄉應不見。朝來好是嬾登樓。

層陰 〔陸沖詩〕洿澤無夷軌。重巒有曾陰（類聚三八）。〔文選二二江淹從冠軍建平王登廬山香爐峯詩〕日落長沙渚。曾陰萬里生（李注　曾。重也。蔡邕月令章句曰。陰者密雲也）。〔杜甫野望詩〕清秋望不極。迢遞起層陰。

7 **制淚** 〔李廓落第詩〕牓前潛制淚。衆裏自嫌身。

思鄉淚 〔張籍西樓望月詩〕寒夜共來望。思鄉獨下遲。〔庾信怨歌行〕回頭望鄉淚落。不知何處天邊。思鄉はなお義山の詩文にそれぞれ一例、〔無題570〕人生豈得長無謂。懷古思鄉共白頭（本稿㈠本誌五三册六六二頁參照）。「補編一爲滎陽公論安南行營將士月糧狀」庶令此境之人。無擁思鄉之念。唯茲裁照。實屬皇明。

8 **入新年** 〔杜甫傷春詩〕鬻入新年語。花開滿故枝。義山の〔大鹵平後書懷十韻556〕鬢入新年白。顏無舊日丹。

不禁 〔文選一三王粲登樓賦〕悲舊鄉之壅隔兮。涕橫墜而弗禁。〔又二三阮籍詠懷詩十七首之十七〕一爲黃雀哀。涕下誰能禁（顏延年沈約等注　孔叢子。賈子陽謂子思曰。吾念周室將滅。涕泣不禁。禁。止也）。

*　*　*

1・2　そのかみ、かの蘇武の帛書を上林苑へ運びとどけた北國の雁も、今は上林すなわち都のかたとは遙かに遙かに遠く南の國へと飛んで來て、果しなく高い秋空の中で歸るべき方角も見失い、

長く聲をあげて鳴くばかり、その鳴き聲は都への便りをわずかに雁に託したい、わたしの嘆きだ。長吟は雁の聲と詩人の嘆聲とにかける。隔上林の解は些か問題だが、今ごろは雁が北から上林苑へ飛來しているだろう、ととるのはやはり無理か。

3・4　わたしもこれまでいろいろな旅の經驗があるが、人の世で旅の道筋に潼江ほどの絶險があろうとは。また玉壘山の奥深さときたら全くこの世のものではなく天地の外にあるかと思われるばかり。潼江・玉壘いずれも當時の義山の任地梓州近邊の山川だが、こうした地形の樣相が一層都への歸還は不可能という氣分を強める。そこから、馮浩の「暗寓人心險於山川也」という解釋も成り立つだろう。しかし寫意の意は、むしろ5・6句にこそあるのではないか。本詩は5・6の實景に觸發されたので、その景に意を託することに最も力が注がれたと考えられる。

5・6　花咲くあたり、そのあたりにだけ夕日の最後の照り返しが殘るが、城の上にかかった雲は層を成して一面を覆い始める。夕日の殘光は希望と同時に不安を象徴する。山川の險に隔てられ、僻遠の地に在る自分。都とのつながりを意識することが僅かな希望の光。しかし今やそのつながりは斷たれ、闇の中に放置されるのではないか、そんな不安に苛まれる。

7・8　すでに三年のあいだ故郷すなわち都を思い續けてあふれんばかりの涙をぐっとこらえてきたが、この狀態でもし新しい年に入ったならばもはや（涙を）押しとどめるすべもないのではあるまいか。

劍南東川節度使たる柳仲郢幕下での思還・思鄕の作たることに舊釋みな一致し、ただ最終連の捉え方で紀昀が異說を唱える。「結は太だ直ならんとするを恐れ、故に態を作し…躱閃の法なり」わざとひねってみせ輕みに逃れた、ということか。何焯・陳永正（一路逼出本意）など多數派の意見とは眞向から對立している。

7句の三年を張采田（安徽師大本年表・陳永正もおなじ）は、〔文集七樊南乙集序〕三年已來。喪失家道。平居忽忽不樂。…是大中七年十一月夜。の「三年」と同じく實數とみなし、柳仲郢の梓州の幕に義山が招かれたのを大中五年（八五一）とし、本詩を大中七年に係ける。張氏は〔初起53〕三年苦霧巴江水、〔二月二日100〕三年從事亞夫營、〔夜飲431〕江海三年客、以上の三詩もみな同樣に七年の作とする。また梓幕への赴任を大中六年とする馮浩は本詩を大中九年に係けるが、本詩の三年を實數とする點では張氏と變らず、要するに本詩の係年はこの三年を實數とみなしうるか否かにかかる。毛本および品彙などに見える異文はいずれもとりあげるに足らない。

（井波陵一）

漢南書事389　漢南に事を書す

西師萬衆幾時廻　西師萬衆　幾時か廻る

哀痛天書近已裁　哀痛の天書　近く已に裁されん

文吏何曾重刀筆　文吏何ぞ曾ち（すなわ）刀筆を重んずる
4 將軍猶自舞輪臺　將軍猶自（なお）　輪臺を舞（もてあそ）ぶ
幾時拓土成王道　幾時か土を拓くは　王道を成せし
從古窮兵是禍胎　古より兵を窮むるは　是禍胎
陛下好生千萬壽　陛下好生　千萬壽
8 玉樓長御白雲盃　玉樓に長（とこしえ）に御す　白雲の盃

校

0 唐詩類苑四三（帝王部帝王類）
1 幾時　馮浩本校注「味詩意。當作幾人」
5 幾時　叢刊本「何年」　馮浩本校注「味詩意。幾時二字誤」

韻

上平十五灰（廻・盃）十六咍（裁・臺・胎）同用

*

朱鶴齡

0 通鑑。大中三年二月。吐蕃秦原安樂三州及石門等七關來降。詔涇原靈武鳳翔邠寧振武。皆出兵應援。又募百姓。懇闢三州七關土田。將吏營田者。官給牛及種糧。其山南劍南沒蕃州縣。亦令收復。四年秋八月。發諸道兵討党項。連年無功。戍饋不已。上頗厭用兵。此詩乃作于其時也。

何焯

〔讀書記〕此指討党項事。第三。責宰相也。用汲長孺刀筆吏不可爲公卿語。

〔評本〕猶自。呼下幾時。哀痛天書。徒爲文具。口論王道。亦碌碌隨刀筆。不肯正議息兵。坐釀國家之禍。吾君老矣。奈何不亟圖所以善其後乎。

陸鳴皋

大中初。李在嶺表。時涇原等處皆出兵納吐蕃降地。幕民開種。又連年討党項無功。上頗厭兵。故作此詩。前半。言天子已有哀痛之心。而奈何文臣武將。尚皆以此爲事乎。舞字更精。言不憂而反樂也。五六句謂無益而有損。末則頌美其君。而願其竟罷耳。

陸崑曾

通鑑。党項之反。由邊帥利其羊馬。數數欺奪誅殺所致。宣宗興兵致討。連年無功。此詩當在大中五年。命白敏中充招討時作也。党項本西羌種。故曰西師萬衆幾時廻也。時上頗厭用兵。特選儒臣。以代邊帥之貪暴者。臨行。復面加戒勵。故曰哀痛天書近已裁也。三句是責相。四句是責將。言刀筆吏既不可爲公卿。而師武臣復養寇以邀賞。國是尚可問乎。時又募百姓懇闢三州七關土田。并山南劍南沒番州縣。亦令收復。故曰幾時拓土成王道也。大中三年。吐蕃等州來降。詔諸道出兵應援。兼以党項之役。戍饋不已。故曰從古窮兵是禍胎也。結言幸而天心厭亂。允崔鉉之議。遣大臣鎭撫。將兵端自此獲息。而一念好生。可長享太平之福矣。

姚培謙

此義山在漢南感時事而作也。大中三年。吐蕃秦原安樂三州。及石門等七關來降。詔諸鎭皆出兵應援。又募百姓懇闢三州七關土田。將吏營田者。官給牛種。其山南劍南沒蕃州縣。亦令收復。四年。發諸道兵討党項。連年無功。戍饋不已。上頗厭用兵。故有此作。

西師萬衆。連兵累歲。天子非無哀痛之辭。乃文吏之刀筆斂手。將軍之驕蹇自如。師老財匱。禍胎不細。惜未有以好生之德。感悟主心者也。

屈復

西師無功。天子將下詔息兵矣。文吏無才。將軍兒戲。如何能拓土。亦徒結禍胎耳。如果有輪臺之悔。國祚綿長。理當然矣。

程夢星

唐書稱宣宗精於聽斷。而以察爲明。無復仁恩之意。結句云好生千萬壽。蓋望其加恩四海。以綿國祚。亦臣子忠愛之義也。上六語。長孺題下注盡之矣。但訂以爲大中四年之作則非。四年。義山在徐州。惟三年。自桂管入朝。乃過漢南耳。

紀昀

〔詩說上〕拓土窮兵。自是正面。而以對哀痛天書言之。則借爲反襯也（評本「故不嫌露骨」の一句多し）。○結句。就哀痛天書作收。極直極曲。可謂之婉而章矣（評本「極直極曲」なし）。○複兩幾時。雖不害爲好詩。如西子捧心。不得謂之非病（評本「幾時二字複」）。

〔評本〕蕭何主關中饋餉。故漢祖藉以有功。在內無此人。將軍在外何益乎。此非輕何之辭。勿泥刀筆二字。

馮浩

0　舊書紀。通鑑。會昌五六年。党項攻陷邠寧鹽州界城堡。發諸道兵討之。至大中四五年。連年無功。戍饋不已。上頗知邊帥欺奪其羊馬。或妄誅殺。党項不勝憤怒。故反。乃以李福爲夏綏節度使。面加戒勵。上頗厭用兵。議遣大臣鎭撫。以宰相白敏中充招討行營都統制置等使。定遠城使史元破党項九千餘帳。敏中奏平夏黨項平。又奏南山党項亦請降。詔幷赦。使之安業。詩蓋自桂歸途經荆江時作。非書漢南之事。

3・4　此聯謂無人案責邊將之罪。

8　玉樓在崑崙。白雲亦仙事。卽瑤池宴飲之義。

〔註補〕

3・4　二句謂不力戰而玩寇自逸。徒令生民被害。

張采田

〔會箋〕馮氏云。舊書紀。（中略）非書漢南之事。箋曰。馮氏徵考甚詳。是年（大中二年）党項尙未就撫。故詩著拓土窮兵之戒。而望其勿生事四夷也。

近代注釋

〔森槐南〕下卷一八七頁。

*

0　**漢南**　〔爾雅釋地〕漢南曰荆州（郭注　自漢南至衡山之陽）。〔文選四二曹植與楊德祖書〕昔仲宣獨步於漢南。孔璋鷹揚於河朔（李注　仲宣在荆州。故曰漢南）。〔孫逖送魏騎曹充宇文侍御判官分按山南詩〕觀風布明詔。更是漢南春。〔馮浩注〕唐時稱山南東道。治所襄州。曰漢南。荆襄地勢同也。

もし漢南に王仲宣への連想があるとすれば、仲宣の次の作などがあるいは意識されているか。〔七哀詩三首之三〕子弟多俘虜。哭泣無已時。天下盡樂土。何爲久留茲。

書事　〔文選四五杜預春秋左氏傳序〕四曰盡而不汙。直書其事。具文見意。丹楹刻桷。天王求車。齊侯獻捷之類。是也。〔宋書五五徐廣傳〕尚書奏曰。臣聞左史述言。右官書事。乘志顯於晉鄭。陽秋著乎魯史。

1 **西師**　〔左傳僖公三二年〕卜偃使大夫拜。曰。君命大事。將有西師過軼。我擊之。必大捷焉。〔韓愈平淮西碑〕西師躍入。道無留者。〔文集三爲絳郡公上崔相公啓〕閒歲已來。爲政非易。有南遷之降虜。有西出之成師（馮注　謂討劉稹）。以上いずれも西方から出撃した軍勢の意で、西方への出兵の例は未見。

萬衆　〔漢書九三石顯傳〕愚臣微賤。誠不能以一軀稱快萬衆。任天下之怨。臣願歸樞機職。受後宮掃除之役。死無所恨。

幾時廻　〔李白對酒醉題屈突明府廳詩〕故人建昌宰。借問幾時廻。

2 〔漢書九六西域傳下〕自武帝初通西域。置校尉。屯田渠犂。是時軍旅連出。師行三十二年。海內虛耗。征和中。貳師將軍李廣利以軍降匈奴。上既悔遠征伐。…乃下詔。深陳既往之悔。曰。前有司奏。…而今又請遣卒田輪臺。輪臺西於車師千餘里。…乃者貳師敗。軍士死略離散。悲痛常在朕心。今請遠田輪臺。欲起亭隧。是擾勞天下。非所以優民也。今朕不忍聞。〔又贊〕孝武之世。…末年遂棄輪臺之地。而下哀痛之詔。豈非仁聖之所悔哉。〔杜甫有感五首之五〕願聞哀痛詔。端拱問瘡痍。

哀痛　〔禮記三年問〕三年之喪。二十五月而畢。哀痛未盡。思慕未忘。〔文章流別論〕哀辭之體。以哀痛爲主。緣以歎息之辭（御覽五九六）。

天書　〔庾信成王刻桐葉封虞讚〕虞叔百里。居河之汾。帝刻桐葉。天書掌文。〔王維春日直門下省早朝詩〕玉漏隨銅史。天書拜夕郎。

裁　〔文選四二曹丕與吳質書〕頃何以自娛。頗復有所述造不。東望於邑。裁書敍心。〔李嘉祐和張舍人中書宿直詩〕漢主留才子。春城直紫微。…裁詔催添燭。將朝欲更衣。

3 (A)何焯および姚培謙說の方向。〔史記五三蕭相國世家贊〕蕭相國何。於秦時刀筆吏。錄錄未有奇節。〔文選四一李陵答蘇武書〕男兒生以不成名。死則葬蠻夷中。誰復能屈身稽顙。還向北闕。使刀筆之吏弄其文墨邪（李注　史記。張釋之曰。秦任刀筆之吏。又功臣曰。蕭何徒持文墨。顯居臣上）。〔漢書五〇汲黯傳〕黯時與湯論議。湯辯常在文深小苛。黯憤發。罵曰。天下謂刀筆吏不可爲公卿。果然必湯也。令天下重足而立。仄目而視矣。是時。漢方征匈奴。招懷四夷。黯務少事。閒常言與胡和親。毋起兵。…刀筆之吏。專深文巧詆。陷人於罔。以自爲功。〔文選四六任昉王文憲集序〕至若文案自環。主者百數。皆深文爲吏。積習成奸（李注　漢書曰。張湯務在深文拘守職之吏）。蓄筆削之刑。懷輕重之意（李注　漢書曰。今有司請定法。削卽削。筆卽筆。服虔曰。言隨君意也）。

(B)馮浩說の方向。〔漢書五四李廣傳〕大將軍使長史…問廣・食其失道狀。…廣未對。大將軍長史急責廣之莫府上簿（師古曰。之。往也。簿謂文狀也）。廣…至莫府。謂其麾下曰。廣結髮與匈奴大

小七十餘戰。今幸從大將軍出接單于兵。而大將軍徙廣部行回遠。又迷失道。豈非天哉。且廣年六十餘。終不能復對刀筆之吏矣。遂引刀自剄。百姓聞之。知與不知。老壯皆爲垂泣。

文吏　〔史記一〇二馮唐傳〕終日力戰。斬首捕虜。上功莫府。一言不相應。文吏以法繩之。其賞不行。而吏奉法必用。臣愚以爲陛下法太明。賞太輕。罰太重。〔文選四三劉歆移書讓太常博士〕若必專己守殘。黨同門。妬道具。違明詔。失聖意。以陷文吏之議。甚爲二三君子不取也。

何曾　(A)何乃（助字辨略二）とよむべき場合。〔楚辭九辯〕竊悲夫蕙華之曾敷兮。紛旖旎乎都房。何曾華之無實兮。從風雨而飛颺。〔文選四二曹丕與朝歌令吳質書〕徐陳應劉。一時俱逝。痛可言邪。昔日遊處。行則連輿。止則接席。何曾須臾相失。

(B)未曾・不曾とよむ場合は擧例するまでもなく、義山詩でもおおむねはこの義である。〔宋玉394〕風賦何曾讓景差で、何乃と解したのはやはり誤りで、宋玉4句何曾の語注は全面的に取消したい（本稿(三)本誌五六册三四五頁）。

なお本詩と同じくAB兩義いずれも通ずる場合がある。〔杜甫存殁口號二首之二〕鄭公粉繪隨長夜。曹霸丹青已白頭。天下何曾有山水。人間不解重驊騮（九家注　趙云。此篇一存一殁也。山水言鄭虔之畫。驊騮言曹霸之畫。末句言無人珍重而藏其畫也。或曰何曾有山水。止言鄭虔殁。更無人會畫山水耳。於義亦通）。

刀筆　〔戰國策六秦策五〕司馬空曰。臣少爲秦刀筆（注　謂爲尚書也。筆以書禮。刀削其不當者）。

4　〔杜甫有感五首之一〕將帥蒙恩澤。兵戈有歲年。

猶自　既出。〔楚宮二首之一264〕猶自君王恨見稀の語注參照、本稿(四)本誌五七册七一三頁。

輪臺　〔漢書六一李廣利傳〕天子業出兵誅宛。宛小國而不能下。則大夏之屬漸輕漢。而宛善馬絕不來。烏孫輪臺。易苦漢使。爲外國笑。…於是貳師後復行。兵多。所至小國莫不迎。出食給軍。至輪臺。輪臺不下。攻數日。屠之。〔又九六西域傳上〕漢興至于孝武。事征四夷。廣威德。…自貳師將軍伐大宛之後。西域震懼。多遣使來貢獻。漢使西域者益得職。於是自敦煌西至鹽澤。往往起亭。而輪臺張犂。皆有田卒數百人。置使者校尉領護。以給使外國者。唐代では岑參の集にこの地名が頻見する。一例をあげれば、〔輪臺歌奉送封大夫出師西征〕輪臺城頭夜吹角。輪臺城北旄頭落。…戍樓西望煙塵黑。漢兵屯在輪臺北。上將擁旄西出征。平明吹笛大軍行。…虜塞兵氣連雲屯。戰場白骨纏草根。…古來青史誰不見。今見功名勝古人。〔馮浩注〕舊書志。隴右道北庭都護府有輪臺縣。有輪臺州都督府。なお富壽蓀「岑參《輪臺歌》中之〝陰山〟」（中華文史論叢八一年一輯）參照。

5　**拓土**　〔文選五左思吳都賦〕拓土畫疆。卓犖兼并。包括干越。跨躡蠻荆。〔傅亮策加宋公九錫文〕公蒐乘秣馬。賁入遠疆。衝櫓四臨。萬雉俱潰。竊號之虜。顯戮司寇。拓土三千。申威龍漠。此又公之功也（宋書二武帝紀中）。〔杜甫有感五首之一〕白骨新交戰。雲臺舊拓邊。

王道　〔書洪範〕無偏無黨。王道蕩蕩。無黨無偏。王道平平。

無反無側。王道正直。〔孟子梁惠王上〕養生喪死無憾。王道之始也。〔文選八揚雄長楊賦〕使海内澹然。永亡邊城之災。金革之患。今朝廷純仁邊道。顯義幷包書林。…普天所覆。莫不沾濡。士有不談王道者。則樵夫笑之。

6 **從古** 〔孟郊送淡公詩十二首之十二〕倚詩爲活計。從古多無肥。

窮兵 〔延篤與段紀明書〕得知窮兵極遠。大捷而反。…莫不魚爛雲除。震懼稽顙矣（書鈔一一七）。〔魏文帝詔〕三世爲將。窮兵黷武。古有成戒（魏志王朗傳注引魏書）。

禍胎 〔文選三九枚乘上書諫吳王〕福生有基。禍生有胎（服虔曰。基。胎。皆始也）。納其基。絕其胎。禍何自來。〔曹毗對儒〕由此言之。名爲實賓。福萌禍胎。朝敷榮華。夕歸塵埃（晉書九二本傳）。〔杜甫秋日荆南述懷三十韻〕結舌防讒柄。探腸有禍胎。

7 **陛下** 〔文選四八司馬相如封禪文〕於是大司馬進曰。陛下仁育羣生。義征不譙。

好生 〔書大禹謨〕皋陶曰。帝德罔愆。…與其殺不辜。寧失不經。好生之德。洽于民心。茲用不犯于有司。〔文選四四鍾會檄蜀文〕今國朝隆天覆之恩。宰輔弘寬恕之德。先惠後誅。好生惡殺（李注　尙書大傳。成王問周公曰。舜何以也。周公曰。其政也。好生而惡殺）。

千萬壽 〔文選一九宋玉高唐賦〕九竅通鬱。精神察滯。延年益壽千萬歲。〔蔡邕上始加元服與群臣上壽表〕臣等不勝踴躍鳧藻。謹奉牛一頭酒九鍾。稽首再拜。上千萬壽。

8 **玉樓** 〔飲席戲贈同舍47〕語注參照。本稿(四)本誌五七册六九七頁。

御 〔文選一一王延壽魯靈光殿賦〕神靈扶其棟宇。歷千載而彌堅。永安寧以祉福。長與大漢而久存。實至尊之所御。保延壽而宜子孫（李注　高唐賦曰。延年益壽千萬歲）。〔又二一盧諶覽古詩〕秦王御殿坐。趙使擁節前（李注　毛萇詩傳曰。御。進也）。

白雲盃 〔穆天子傳三〕乙丑。天子觴西王母于瑤池之上。西王母爲天子謠曰。白雲在天。山隙自出。〔張說侍宴隆慶池應制詩〕願似金堤青草色。長承瑤水白雲盃。

* * *

漢南書事の事は、いわゆる記言記事の事におなじく、寄懷、寫懷といった場合と異り、のべられる內容の輪廓はより明確なはずで、馮浩の說くごとく漢南において事（＝時事・時局）を書した作。諸注釋すべて會昌・大中年間の吐蕃・黨項討伐作戰を批判したと、異議なくみとめる。だが係年に至っては全く各人各說であり、

大中初年　陸鳴皋
〃　二年　馮浩・張采田（安徽師大おなじ）
〃　三年　程夢星
〃　四年　朱鶴齡・姚培謙
〃　五年　陸崑曾

なかで程氏および馮氏張氏は、史書の記載だけでなく作者の行動をも考慮に入れて年代決定を行い、さすがにあとほど細工がこまかくなる。

1・2　西方へと出征した我が軍、萬を數える兵士たちは、いったい何時になったら歸還するのだろうか。今もなお續く、あまりに長い長い戰さに、天子は御心を惱ませられ、悲痛なる反省をこめた詔が近く渙發されることになったとか。例によって詩のベースとなるのは漢代――武帝の故事である。武帝の晩年、征和年間にかの哀痛の詔が下されたわけだが、唐代、義山のころには諸注の引く通鑑大中五年「上頗厭用兵」以外に對應の記事は史書にない。王汝弼・聶石樵箋注「玉谿生詩醇」（一九八七・齊魯書社）は「絕漢武遠征之悔」の一句を含む大中三年八月の制（舊唐書宣宗紀）をこれに當てるが、「哀痛天書」とは到底みなしがたい。〝史實〟として確認できぬ危うさを避ける上から、また何よりも作品の文脈からして、2句を近未來に解する屈復のよみに從いたい。天書が出される噂が流れたか、または義山の希望的觀測か、ともかく實際に出されたのではなかった。屈氏には時たま餘人の追隨を許さぬひらめきがある。さらに「近已」の已は、たとえば日已と同じように、語助として輕く付く已かもしれない。もしそうとするならば――天書は近く渙發されるらしい。

3・4　嘆かわしい現狀は、文官の無能と武官の横暴によるものというのだが、4句は比較的問題ないとして3句について舊解はほぼ三通りに分れる。

(A)何焯說。文官、端的には宰相どもは法律をひねくり廻しては天子の意を迎える小刀細工ばかりに何とまあ驚くほどの熱のあげよう。陸崑曾もどうやら同意見か。

(A)′姚培謙說。文官どもは本分を忘れて法律の番人たる職務を一向にかえりみようとはしない。

(B)馮浩說。文官どもが職務を忠實に果さぬため、法規に照らしての武官への統御が全く果たされなくなった。紀昀があるいは同意見か。森槐南も馮氏に從う。

B說は3・4の連關を最もよく考えてはあるようだが、刀筆の吏なるイメージは紀昀の辯明にもかかわらず決定的に惡く、さらに刀筆の吏による武官統制を是認する典據として、悲運の名將李廣の最期が持ち出されるのはあまりに異和感が强い。ここも馮注に時おり見られる考えすぎの一例。A′說は中途半端で迫力に乏しい。やはりA說をとりたい。從って3句の何曾は何乃とよみかえる。A′・B說ならば當然何曾は否定の語氣によむ。

4句の舞の字は一きわ「精」（陸鳴皋）とされるだけに、また些か特異な表現。國利民福の面からすればとうに放棄すべき外地を未だに食い物にする意か。

5・6　いったい何時の世に領土擴張は眞の王者の道を完成させたことか。昔から無暗と兵力を使用するのは禍の種だときまっている。義山の近體詩に字の重複はむしろ普通だが、本詩の1句と5句に同一語彙の重複があるのは珍しい。馮浩は誤りとみる。5句の幾時を叢刊本が「何年」に作るのは意を以て改めたのであろうが、依然として6句の「從古」とはうまく對せぬ。同系のテキスト、稿本。類苑本はいずれももとのまま。

7・8　いまどきの文吏・將軍の輩とは大違いで、およそ生きとし

生けるものの生を愛し、民草の死に哀痛の念を抱かれる陛下、陛下自身にも千年萬年の御壽命を。金殿玉樓にいついつまでも御出座になり、白雲の杯――神仙の靈酒をお召し下さい。結びは、何焯（評本）および屈復がほのめかすとおり、天子への譏諷がこめられよう。陛下が「民の疾苦を憐まるゝの心が乏しかつたから、今日までの事が有つた」「今、陛下が玉樓の上に燕居して御出になるのは」「御自身が生を好まるゝところであつて、一向、百姓の爲めでは無いといふ意が、此中に在ります。」（森槐南）

（松尾良樹）

有感二首 乙卯年有感丙辰年詩成之一 269 感有り二首 乙卯年感有り丙辰年詩成るの一

九服歸元化　九服　元化に歸し
三靈叶睿圖　三靈　睿圖に叶う
如何本初輩　如何ぞ　本初の輩
4 自取屈鼇誅　自ら取る　屈鼇の誅
有甚當車泣　車に當りて泣かしむるより甚だしき有り
因勞下殿趨　因りて殿を下りて趨るに勞せしむ
何成奏雲物　何ぞ成すや　雲物を奏するを
8 直是滅萑蒲　直だ是　萑蒲を滅す
證逮符書密　證逮われ　符書密なり
詞連性命俱　詞連り　性命俱にす
竟緣尊漢相　竟に漢相を尊ぶに緣り
12 不早辨胡雛　早に胡雛を辨ぜず
鬼籙分朝部　鬼籙　朝部を分ち
軍烽照上都　軍烽　上都を照す
敢云堪慟哭　敢て慟哭す堪しと云わんや
16 未免怨洪爐　未だ洪爐を怨むを免れず

校

0 唐詩類苑一一九（人部感遇類）
題注　唐晉統籤「自注乙卯年有感丙辰年詩成　二詩咏甘露之變」　錢寫本書眉「[?]年値甘露之變」　稿本朱筆「此詩爲文宗甘露之變」　全唐詩「原注乙卯年有感丙辰年詩成二詩紀甘露之變」
朱鶴齡本「原注」二字を冠す　馮浩本・張采田會箋「自注」二字を冠す
丙辰年　毛本「丙辰歲」
8 滅　錢本「?」を「滅」に改む　高麗本「減」寫
蒲　叢刊本・稿本・類苑「莆」　錢寫本「蒲」を「莆」に改む　毛本・錢龍惕本・朱鶴齡本・全唐詩・庫本「苻」
9 書　叢刊本「畫」　稿本「畫」を「書」に改む
10 詞　他本みな「辭」
11 尊　類苑「眞」
13 籙　統籤「錄」
分　麗本「今」
16 免　麗本「竟」

爐　叢刊本・稿本・類苑・毛本「鑪」　統籤・錢龍惕本「鑪」
錢寫本「爐」を「鑪」に改む

韻

上平十虞（誅・趨・俱・雛）十一模（圖・蒲・都・爐）同用

*

錢龍惕

甘露之變。從古未有之事也。閹豎橫行。南司塗炭。朝右束手而奉行。明主呑聲而免禍。可謂日月晦冥。陵谷震蕩矣。當時士大夫。深嫉訓法之姦邪。反若假手寺人。殲除大憝。故文致二人之罪。以爲千窮奇而百檮杌。一旦肆諸市朝。便朝廷清明。上下無事者。一時若鄭覃李石諸人。以不忤中人而命相矣。李德裕李宗閔以訓注所逐而量移矣。令狐楚號爲仇士良所不悅。而見王涯訊諜。則曰然。涯誠有謀。罪應死矣。節度使兵仗參辭。則乞停罷矣。汲汲然唯恐得罪宦官以取禍。而訓注之惡。亦遂昭布于天下後世。論者不咎文宗之不密失臣。則恨訓注之狂躁悞國。而當日情勢。未有究論之者。可異也。自古以來。宦官盜竊國柄。兇橫不可制者。莫過于漢之十常侍。故何進等謀誅之不勝。反爲所殺。然進之謀。進始之。非命于靈帝也。李訓內與文帝謀。而外連藩鎭以誅宮奴。謂之奉天討可也。詐言甘露。衷甲帷幙。謂之權以濟勇可也。事已敗裂。猶扳呼乘輿。投身虎口。謂之死不忘君可也。殆奄人得志。身分族滅。此時文宗稍欲救之。卽有閻樂望夷之禍。天道至此。不可問矣。何獨區區罪訓也。使其非平昔傾險君子。猶將予之不成之責。何乃甚乎。況山有猛獸。黎藿不採。使當時國之重臣。有不畏强禦者。倡言訓等之無辜。士良諸兇。猶未必刃加其頸也。乃箝口不言。而請王涯三相罪名。僅僅出于劉從諫。亦可恥矣。義山詩云。古有清君側。今非乏老成。素心雖未易。此擧太無名。誰瞑銜冤目。寧呑欲絕聲。其感憤激烈。有不同于衆人之言者。故表而出之如此。

朱鶴齡

〈錢龍惕箋〉甘露之變。從古所未有也。閹豎橫行。南司塗炭。當時士大夫深嫉訓注之奸邪。反若假手宦寺。殲除大憝者。一時如鄭覃李石。以不忤中人而命相矣。李德裕李宗閔以訓注所逐而量移矣。令狐楚號爲仇士良所不悅。而上問王涯手書反狀。則應曰然矣。節度使兵仗參辭。則乞停罷矣。汲汲然惟恐得罪宦官以取禍。後世不咎文宗之不密失臣。則恨訓注之狂躁誤國。而當日情勢。未有冤論之者。可異也。自古以來。宦官盜竊國柄。莫橫于漢之十常侍。故何進等謀誅之不勝。反爲所殺。然進之謀。進始之。非命于靈帝也。訓內與文宗謀。而外連藩鎭。以誅宮奴。謂之奉天討可也。詭言甘露。衷甲帷幄。謂之謀勇可也。事已敗裂。猶攀呼乘輿。投身虎口。謂之死事可也。迨奄人得之。身分族滅。此時文宗稍欲救之。則有閻樂望夷之禍。天道至此。不可問矣。何獨區區罪訓也。使非平日傾險君子。猶將與之不成之責。何乃甚乎。其時設國有重臣。不畏强禦。倡言訓等之無辜。士良諸凶。猶未必刃加其頸也。乃箝口不言。而請王涯三相罪名。僅僅出于劉從諫。亦可恥矣。義山詩云。古有清君側。今非乏老成。素心雖未易。此擧太無名。誰瞑銜冤目。寧呑欲絕聲。其感憤激烈。有不同于衆論者。予故表而出之（原五

四〇字を四三〇字に節略)。

朱彝尊

4　自取二字亦微詞。

8　謂訓注爲盜可乎。亦微詞也。

何焯

〔讀書記〕上篇。深斥訓注。下篇則哀涯餗元輿等。重有感一篇。并懼文宗將有望夷之禍。而望藩鎭協力以救之。

〔評本〕多用反語。然實深傷之。末稍致怨意。

7・8　歸禍于天。風人之旨。

姚培謙

此爲甘露之變鳴冤也。訓注之奸邪可罪。訓注之本謀不可罪。二詩。前首恨訓注之淺謀。後首咎文宗之誤任。蓋君臣皆有責也。○清平之世。橫戮大臣。實則訓注淺謀所自取也。至使至尊爲下殿之趨。臣子等萑苻之戮。證逮株連。徒受漢相之尊。不辨城狐之勢。此時憐訓注者歎其受誣。而惡訓注者方洩其夙怨也。哀哉(錢龍惕箋を引かない)。

屈復

〈錢龍惕箋〉(朱鶴齡本により引く)

一段。恨其無才略而擧大事。二段。恨其果至于敗。三段。文宗不能識人。遂令枉殺朝臣。結呼天痛哭也。

程夢星

〈錢龍惕箋〉(朱鶴齡本により引く)

錢箋洵爲論史卓識。得此詩之旨矣。然詩中用事。不無可議。李訓固非君子。然謀誅宦官則是。詩中直指爲東漢反畔之龐萌。令狐楚固非小人。然應證王涯則非。詩中乃誤爲抗爭董卓之盧植。得毋亦有不公乎。知人論世。蓋有所不得已者。義山當文宗時。亦定衷之閒多微詞也。

紀昀

〔詩說上〕起二句。言人心天命。俱未去唐。非眞有社稷存亡之慮。無容急據圖之也。○四家評曰。結句歸禍於天。風人之旨。

〔評本〕此慨訓注之輕擧。文宗之誤任。致王涯等無辜蒙冤也。前首。起四句言人心天命。俱未去唐。雖宦官操柄。未據有宗社之憂。何必自取誅夷。五句至八句敍當日之變。九句十句言蔓累之慘。十一十二句點明誤任匪人之過。十三句言殺戮之多。十四句言形勢之危。總束上文。而末以運數結之。四家評曰。禍歸於天。風人之旨。是也。

馮浩

〈錢(良擇)曰〉用意精嚴。立論婉摯。少陵又何加焉。〈節錄錢龍惕曰〉甘露之變。閹豎橫行。南司塗炭。當時士大夫。深疾訓注之姦邪。反若假手宦寺。殲除大憝者。後世不咎文宗之不密失臣。則恨訓注之狂躁誤國。而當日情勢。未有冤論之者。可異也。使非平日傾險君子。猶將與之不成之責。何乃甚乎。義山詩感憤激烈。有不同於衆論者。〈浩曰〉夕公之論甚正。其中有過譽處已刪之矣。謀誅宦官。反被慘禍。誠堪憐憤。然文宗任用非人。亦不能辭其咎。義山措語。皆有分寸。二篇皆痛李訓。而連及王涯輩。通體不重鄭注。蓋史雖稱訓注爲二兇。然注之陰惡。更甚於訓。細閱史書自見。

故訓猶可憐。而注惟可惡。行次西郊篇340中專斥注一人也。

0 〈舊新書李訓鄭注等傳〉文宗以宦者太盛。繼爲禍胎。思欲芟除。以雪讎恥。因鄭注得幸王守澄。俾之援李訓。冀黃門之不疑也。上以訓言論縱橫。必能成事。遂以眞誠謀之。擢同平章事。訓卽謀誅內豎。杖殺陳宏慶。酖王守澄。乃以注節度鳳翔。先之鎭。又以郭行餘鎭邠寧。王璠鎭太原。羅立言知大尹。韓約爲金吾街使。李孝本權中丞。璠行餘未赴鎭間。廣令召募豪使及金吾臺府之從者。俾集其事。太和九年乙卯十一月二十一日。上御紫宸。班定。韓約不報平安。奏曰。金吾仗院石榴開。夜有甘露。臣已進狀訖。宰相百官稱賀。訓請親幸左仗觀之。班退。上乘軟輿出紫宸門。升含元殿。百官班列。令宰相兩省官先往視。既還。曰。臣等恐非眞甘露。不敢輕言。言出。四方必稱賀也。帝曰。韓約妄耶。乃令左右軍中尉仇士良魚弘志帥諸內臣往視之。既去。訓詔璠行餘曰。來受勅旨。璠恐悚不能前。行餘獨拜殿下。時兩鎭官健。皆執兵在丹鳳門外。訓已令召之。惟璠從兵入。邠寧兵竟不至。中尉至左仗聞幕下有兵聲。驚恐走出。內官廻奏。韓約氣懾汗流。不能擧首。中官又奏曰。事急矣。請陛下入內。卽擧軟輿迎帝。訓呼金吾衛士曰。來。上殿護乘輿。內官決殿後罘罳。擧輿疾趨。訓攀曰。陛下不得入。內金吾衛士數十人隨訓而入。立言孝本率臺府從人共四百餘。上殿縱擊內官。死傷者數十人。訓持愈急。邐迤入宣政門。帝瞋目叱訓。宦者郄志榮奮拳擊其胸。訓仆地。帝入東上閤門。門卽闔。須臾。內官率禁兵五百人露刃出。遇人卽殺。訓璠行餘約立言孝本及宰相王涯賈餗舒元輿等皆族誅。注與訓謀事有期。欲中外協勢。聞訓事發。自鳳翔率親兵五百赴闕。聞敗乃還。監軍張仲淸殺之。傳首京師。王涯爲禁兵所擒。士良鞫其反狀。涯實不知其故。榜笞極酷。乃手書反狀以自誣。凡坐訓注而族者十一家。當訓攀輦時。士良曰。李訓反。帝曰。訓不反。及訓已敗。士良曰。王涯與訓謀逆。將立鄭注。僕射令狐楚鄭覃等至。帝對悲憤。因付涯訊牒。曰。果涯書耶。楚曰。然。涯誠有謀。帝逼宦官。於是下詔暴涯訓等罪。

1・2・3・4 李訓爲宰相揆之族孫。世爲冠族。其死於宦官又相類。故以屈氂比之。蓋此事以李訓爲謀主也。二聯言下臨九服。上奉三靈。誅此刑餘。當如鼓洪爐燎毛髮。何乃謀之非人。望其爲本初。而反致廚車之狗哉。自取字正有含痛。

5・6 後漢書虞翻傳…時（中常侍張）防立在帝後。（孫）程叱曰。何不下殿。防不得已。趨就東廂。按。以趨就東廂。比士良等至左仗。典切極矣。（袁）盎止令（趙）談泣而下車。今訓之用意。大有甚也。舊注謬甚。

7・8 二句指詭稱甘露。實欲聚中官於左仗而殺之也。然下聯接不融貫。或謂宦官率兵殺訓注等。反似滅此衆盜。

9・10 謂王涯等十餘族及訓黨千餘人也。符書性命皆疊韻。義山精於聲律。疊韻雙聲。屬對工巧。且有句中上下字牽搭而用者。如宋玉394之宮供夢送。留贈畏之146之驚鸚弄鳳。是也。不暇一一標出。讀者當細會之。

11 舊新書傳。訓容貌魁梧。神情灑落。多大言自標置。天子傾意任之。天下事皆決於訓。中尉禁衛諸將見訓。皆震慴迎拜叩首。

12 上句謂但知尊倚李訓。此句謂不悟士良之不易誅。然於意不順。

當以比鄭注之險惡兆亂。舊書傳。注本姓魚。冒姓鄭氏。故號魚鄭。時人目之爲水族。此只取見異爲患。不必過泥。然此句與萑苻。皆未免意爲事晦耳。

16　田（蘭芳）曰。歸禍於天。風人之旨。

〔註補〕清江三孔集孔文仲經父論。李訓義不顧難。忠不避死。而惜其情銳而器狹。志大而謀淺。

張采田

〔辨正〕二詩悲憤交集。直以議論出之。筆筆沈鬱頓挫。波瀾倍極深厚。屬對又復精整。雖少陵無以遠過。豈晚唐纖瑣一派所能望其項背哉。

〔會箋〕甘露之變。發難訓注。而謀則斷自文宗。二詩怨憤之中。下語皆有分寸。爲帝危。爲王涯諸人痛。腐心羣豎。切齒二兇。無可奈何。然後歸之於天。錢夕公所謂感憤激烈。不同衆論者。眞詩史也。

沈德潛（唐詩別裁集一八）

清平之世。橫戮大臣。由訓注淺謀自取也。至使天子下殿。無辜證逮。不亦可哀之甚哉。

0　爲甘露之變而作。前一首恨李訓鄭注之淺謀。後一首咎文宗之誤任非人也。

3・4　訓注欲學袁紹之誅宦官。自取劉屈氂之腰斬也。

7　指奏甘露。

8　比王涯諸臣爲萑莆之盜。誤矣。

12　王衍謂石勒有異志。

近代注釋

〔森槐南〕上卷二六八頁。〔劉若愚〕一六八頁。〔安徽師大〕七頁。〔陳永正〕一一九頁。

*　*

0　〔唐音癸籤二六〕椓人可畏。主兵權尤可畏。唐人諷切及此輩者。自況之囝詩。居易之司天臺歌。李商隱之有感二律外。無聞焉。卽其詩旨。亦靡弗譎而晦也。使天下不敢言。而猶欲恃之以保危祚。何怪乎終爲令孜諸奴所誤哉。

〔新唐書五八藝文志雜史類〕李潛用乙卯記一卷（李訓鄭注事）大和摧兇記一卷　野史甘露記二卷〔蔡寬夫詩話〕義山詩集載有感篇而無題。自注云。乙卯年有感。丙辰年詩成。其中有如何本初輩自取屈氂誅。又。蒼黃五色棒掩遏一陽生之語。按李訓鄭注作亂。實以冬至日。是年歲在乙卯。則是詩蓋爲訓注作也。唐小說記此事。謂之乙卯記。大抵不敢顯斥之云（漁隱叢話前集二二西崑體條）。〔韻語陽秋九〕唐太和末。閹尹恣橫。天子以擁虛器爲恥。…嗚呼。東漢之季。柄在宦官。陳蕃之徒。以忠勇之資。謀殪其黨。而事亦不遂。史載其名。殆如日星。而訓注以當時士夫畏懾士良輩。遂加以姦兇之目。而史亦以爲亂人。萬世之下。無以自白。其深可痛哉。余家舊藏甘露野史二卷。及乙卯記一卷。二書之說。時相矛盾。甘露野史言上令訓等誅宦官。事覺反爲所擒。而乙卯記乃謂訓等有逆謀。蓋甘露史出於朝廷公論。而乙卯記附會士良之私情也。乙卯記後有朱實跋尾數百言。以乙卯所記爲非是。其說與野史同。余故表而出之。〔直齋書錄解題〕太和野史三卷。不著名氏。但稱大中戊辰。陳郡

袁濤序。自鄭注而下十七人。本共爲一軸。濤分之爲三卷。　太和摧兇記一卷。文與上同。而不分卷。豈其初本邪。　野史甘露記二卷。不著名氏。上卷記甘露之禍。下卷記諸臣本末。　乙卯記一卷。唐布衣李潛用撰。末又有吳郡李實者述訓注本謀附益之。乙卯。太和九年也。

有感　〔後漢書和帝紀四〕詔曰。高祖功臣。蕭曹爲首。有傳世不絕之義。曹相國後。容城侯無嗣。朕望長陵東門。見二臣之壠。循其遠節。每有感焉。唐人の詩題としては杜甫に〔有感五首〕、また劉禹錫に〔有感〕のそれぞれ五律がある。杜甫の方は開元以來の領土擴張を批判する政治詩だが、劉の作はごく普通の個人的感慨をのべるに止まり、本詩とは內容的に全く關係がない。

詩成　〔南史四九王僧孺傳〕竟陵王士良嘗夜集學士。刻燭爲詩。四韻者則刻一寸。以此爲率。（蕭）文琰曰。頓燒一寸燭。而成四韻詩。何難之有。乃與（丘）令楷江洪等共打銅鉢立韻。響滅則詩成。皆可觀覽。〔杜甫寄李十二白二十韻〕筆落驚風雨。詩成泣鬼神。

1・2　〔文選四七陸機漢高祖功臣頌〕茫茫宇宙。上嶙下黷。波振四海。塵飛五岳。九服徘徊。三靈改卜（李注　周書曰。乃辨九服之國。春秋元命苞曰。造起天地。鑄演人君。通三靈之貺。交錯同端）赫矣高祖。肇載天祿。〔王融畫漢武北伐圖上疏〕方今九服清恰。三靈和晏。木有附枝。輪無異轍（南齊書本傳）。義山にまた、〔昭肅皇帝挽詞三首之一362〕九縣懷雄武。三靈仰睿文。

1　**九服**　〔周禮夏官職方氏〕乃辨九服之邦國。方千里曰王畿。其外方五百里曰侯服。又其外方五百里曰甸服。又其外方五百里曰男服。又其外方五百里曰采服。又其外方五百里曰衞服。又其外方五百里曰蠻服。又其外方五百里曰夷服。又其外方五百里曰鎭服。又其外方五百里曰藩服（鄭注　服。服事天子也）。

元化　〔陳子昂感遇詩三十八首之六〕古之得仙道。信與元化幷。〔又之三十八〕仲尼探元化。幽鴻順陽和。大運自盈縮。春秋迭來過。

2　**三靈**　(a)馮注に引かれる〔文選八揚雄羽獵賦〕方將上獵三靈之流。下決醴泉之滋（如淳曰。日月星垂象之應也）。(b)朱注に引かれる〔文選四八班固典引〕答三靈之蕃祉。展放唐之明文（善曰。三靈。天地人也。已見陸機高祖功臣頌）。九服と對して用いられる三靈は(a)の意に解する方が妥當のようだが、李善は(b)の意とする。〔舊唐書一七下文宗紀〕開成二年三月壬申詔。…將欲俗致和平。時無殃咎。然誠未格物。謫見於天。仰愧三靈。俯慚庶彙。思獲攸濟。浩無津涯。

睿圖　〔文選二〇顏延之皇太子釋奠會作詩〕虞庠飾館。睿圖炳晬（李注　禮記曰。有虞氏養國老於上庠。睿圖。孔聖之圖畫也。炳。丹青色也）。〔隋書一〇樂志下圜丘歌文舞辭〕皇矣上帝。受命自天。睿圖作極。文敎遐宣。〔賞誅鄭注功臣軍士詔〕朕以寡德。祇荷睿圖。於茲十年。夙夜惟寅。嘗恐至誠不達。景化未敷（大和九年十一月）。

3・4　甘露の變に言及する義山の作に、〔哭虔州楊侍郎虞卿591〕漢網疎仍漏。齊民困未蘇。如何大丞相。翻作拖刑徒（馮注　二語

謂宗閔)。本作品と同じく五排の初四句、馮浩・張采田・安徽師大いずれも開成二年に係ける。

3 **本初** 〔後漢書袁紹列傳六四上〕袁紹字本初。汝南汝陽人。〔又何進列傳五九〕紹乃引兵屯朱雀闕下。捕得(中常侍)趙忠等。斬之。…紹遂閉北宮門。勒兵捕宦者。無少長皆殺之。或有無須而誤死者。至自發露。然後得免。死者二千餘人。

4 **自取** 〔九州春秋〕初紹說進曰。…前竇武欲誅之。而反爲所害。…五營士生長京師。服畏中人。而竇氏反用其鋒。遂果叛走歸黃門。是以自取破滅(魏志六袁紹傳注)。〔討鄭注優賞軍士德音〕(賊)若不能悛改。自取誅夷。罪止一身。其餘脅汙。一切不問。

屈氂 〔漢書六六劉屈氂傳〕劉屈氂。武帝庶兄中山靖王子也。…爲左丞相。…是時治巫蠱獄急。內者令郭穰告丞相夫人以丞相數有譴。使巫祠祝詛主上。…欲令昌邑王爲帝。…有詔載屈氂廚車以徇。要斬東市。妻子梟首華陽街。

5 **有甚** 〔孟子梁惠王上〕以若所爲。求若所欲。猶緣木而求魚也。曰。若是其甚與。曰。殆有甚焉。緣木求魚。雖不得魚。無後災。以若所爲。求若所欲。盡心力而爲之。後必有災。〔後漢書何進傳〕(張)讓等詰進曰。天下憒憒。亦非獨我曹罪也。先帝嘗與(何)太后不快。幾至成敗。我曹涕泣救解。…今乃欲滅我曹種族。不亦太甚乎。

當車泣 (a)〔朱鶴齡注〕魏志(四注引魏略)嘉平六年。景王廢帝。遣使者授齊王印授。當出就西宮。帝受命。遂載王車。與太后別垂涕。始從太后殿南出。羣臣送者數千人。司馬孚悲不自勝。餘多流涕。

(b)〔說苑君道〕禹出見罪人。下車而泣之。左右曰。…君王何爲痛之至於此也。禹曰。堯舜之人。皆以堯舜之心爲心。今寡人爲君也。百姓各自以其心爲心。是以痛之也。書曰。百姓有罪。在予一人。佩文韻府は「下車泣」の條にこの話および本詩5・6句を引く。

(c)〔馮浩注〕は漢書爰盎傳を引く。〔史記一〇一袁盎傳〕宦者趙同以數幸。常害袁盎。…孝文帝出。趙同參乘。袁盎伏車前曰。臣聞天子所與共六尺輿者。皆天下豪英。今漢雖乏人。陛下獨奈何與刀鋸餘人載。於是上笑。下趙同。趙同泣下車。〔劉蕡賢良方正直言極諫策 太和二年春三月〕臣以爲陛下之所慮者。宜先憂宮闈將變。社稷將危。天下將傾。海內將亂。此四者乃國家已然之兆。…奈何以褻近五六人。總天下之大政。外專陛下之命。內竊陛下之權。威懾朝廷。勢傾海內。群臣莫敢指其狀。天子不得制其心。禍稔蕭牆。奸生帷幄。臣恐曹節侯覽。復生於今日矣。此宮闈之所以將變也。…今忠賢無腹心之寄。閹寺專廢立之權。陷先帝不得正其終。致陛下不得正其始。…此社稷之所以將危也。…故樊噲排闥而雪涕。袁盎當車而抗詞。京房發憤以殞身。竇武不顧而畢命。此陛下皆明知之耳(文苑英華四九三)。

當車 〔後漢書孟嘗列傳六六注〕禽息。秦大夫。薦百里奚而不見納。繆公出。當車以頭擊闑。腦乃播出。曰。臣生無補於國。不如死也。繆公感寤。而用百里奚。奏以大化。〔漢書二七五行志下之上〕(昌邑王)賀卽位。天陰。晝夜不見日月。賀欲出。光祿大夫夏侯勝當車諫曰。天久陰而不雨。臣下有謀上者。陛下欲何之。賀

怒。縛勝以屬吏。〔後漢書种嵩列傳四六〕擢嵩監太子於承光宮。中常侍高梵從中單駕出迎太子。…嵩乃手劍當車曰。太子國之儲副。人命所係。今常侍來無詔信。何以知非姦邪。今日有死而已。梵辭屈。不敢對。馳命奏之。…帝亦嘉其持重。稱善者良久。

6 **下殿趨** 〔通鑑一五六梁紀中大通六年〕先是熒惑入南斗。去而復還。留止六旬。上以諺曰。熒惑入南斗。天子下殿走。乃跣而下殿以禳之。及聞魏主西奔。慙曰。虜亦應天象邪。朱鶴齡以來諸注みな梁武本紀を引くが、この諺は梁書・南史・北史みな載せない。〔杜甫收京三首之一〕仙仗離丹極。妖星照玉除。須爲下殿走。不可好樓居（九家注　世說。熒惑入南斗。天子下殿走。謂避亂世）。但し今本世說には見えない。この言葉が杜詩にも引かれるのは詹滿江「甘露の變と詩人たち——李商隱を中心として」（日本中國學會報三七集）に教えられた。〔杜牧阿房宮賦〕妃嬪媵嬙。王子皇孫。辭樓下殿。輦來于秦。朝歌夜絃。爲秦宮人。

7 **何成** 徐仁甫廣釋詞四八二頁に、成猶爲とし、楊巍の詠舞の詩に見える詎成多を豈爲多と釋す。ここも何爲と解すべきに似る。

雲物 〔左傳僖公五年〕春。王正月。辛亥朔。日南至（杜注　周正月。今十一月。冬至之日）。公既視朔。遂登觀臺以望。而書。禮也。凡分。至。啓。閉。必書雲物（杜注　分。春秋分也。至。冬夏至也。啓。立春立夏。閉。立秋立冬。雲物。氣色災變也）。爲備故也（素察妖祥。逆爲之備）。〔唐會要二四受朝賀〕（開元八年）十一月十三日。中書門下奏曰。伏以十四日冬至。一陽初生。萬物潛動。所以自古聖帝明王。皆以此日朝萬國。觀雲物。禮之大者。莫逾是時。…因勅自今以後。冬至日受朝。永爲常式。

8 **萑蒲** 〔左傳昭公二十年〕十月…山林之木。衡鹿守之。澤之萑蒲。舟鮫守之。藪之薪蒸。虞候守之。海之鹽蜃。祈望守之（杜注　衡鹿舟鮫。虞候祈望。皆官名也）。十二月…鄭國多盜。取人於萑苻之澤（杜注　萑苻。澤名。於澤中劫人。〈釋文〉萑。音丸。苻。音蒲。又如字）。大叔…興徒兵以攻萑苻之盜。盡殺之。盜少止。

9・10 〔補編七爲滎陽公與三司使大理盧卿啓〕座主既不免於款中。雜端固無逃於筆下。乘時幸遠。背惠加誣。既置對之莫由。豈自明之有望。若據其證逮。按彼詞連。則處以嚴科。無所逃責。

9 **證逮** 〔漢書五三劉勃傳〕常山憲王舜…薨。子勃嗣爲王。…（憲王）及薨。六日出舍。…私姦飲酒。博戲擊筑。與女子載馳。環城過市。入獄視囚。天子遣大行騫驗問。逮諸證者（師古曰。逮。捕之）。王又匿之。〔又六〇杜周傳〕至周爲廷尉。詔獄益多矣。二千石繫者新故相因。不減百餘人。…一歲至千餘章。章大者連逮證案數百。小者數十人。…會獄（師古曰。往赴對也）。吏因責責如章告劾。不服。以掠笞定之。於是聞有逮證。皆亡匿。

符書 〔宋書五三謝方明傳〕江東民戶殷盛。風俗峻刻。强弱相陵。姦吏蜂起。符書一下。文攝相續。又罪及比伍。動相連坐。一人犯吏。則一村廢業。

10 **詞連** 〔史記一一八淮南王安傳〕廷尉以王孫建辭連淮南王太子遷上聞。上遣廷尉監因拜淮南中尉。逮捕太子。〔後漢書竇武列傳五九〕使（山）冰奏素狡猾尤無狀者長樂尚書鄭颺。送北寺獄。…令冰與尹勳侍御祝瑁雜考颺。辭連及曹節王甫。勳冰卽奏收節等。

性命　〔易乾〕乾道變化。各正性命。保合大和。〔漢書五六董仲舒傳〕武帝卽位。擧賢良…制曰。…性命之情。或天或壽。或仁或鄙（師古曰。夭壽。命也。仁鄙。性也。鄙謂不通也）。習聞其號。未燭厥理。…仲舒對曰。…臣聞命者天之令也。性者生之質也。情者人之欲也。或夭或壽。或仁或鄙。陶冶而成立。不能粹美。有治亂之所生。故不齊也。

11 **漢相**　〔史記一〇七武安侯傳〕武安侯者貌寢。生貴甚。…嘗召客飲。坐其兄蓋侯南鄉。自坐東鄉。以爲漢相尊。不可以兄故私橈（漢書五二田蚡傳略同）。

〔漢書八二王商傳〕天子甚尊任之。爲人多質有威重。長八尺餘。身體鴻大。容貌甚過絕人。河平四年。單于來朝。…仰視商貌。大畏之。遷延却退。天子聞而歎曰。此眞漢相矣。〔王維上張令公詩〕匈奴遙俯伏。漢相儼簪裾。

12 **胡雛**　〔晉書一〇四後趙載記上〕石勒字世龍。…其先匈奴別部羌渠之胄。…年十四。隨邑人行販洛陽。倚嘯上東門。王衍見而異之。顧謂左右曰。向者胡雛。吾觀其聲。視有奇志。恐將爲天下之患。…父老及相者皆曰。此胡狀貌奇異。志度非常。其終不可量也。魏書にこの話は見えない。

13 **鬼籙**　〔文選四二曹丕與吳質書〕徐陳應劉。一時俱逝。痛可言邪。…頃撰其遺文。都爲一集。觀其姓名。已爲鬼錄。追思昔遊。猶在心自。而此諸子。化爲糞壤。可復道哉。〔三國吳志四六孫策傳引江表傳〕策曰。…今此子已在鬼籙。勿復廢紙筆也。卽催斬之。

朝部　用例未見。朝班というべきを押韻のために變えたか。〔左傳莊公二十三年〕夫禮所以整民也。故會以訓上下之則。制財用之節。朝以正班爵之義。帥長幼之序。〔杜甫自瀼西荆扉且移居東屯茅屋詩四首之四〕寒空見鴛鷺。回首憶朝班（九家注　末句。公嘗爲左拾遺。通籍而朝。故見鴛鷺而憶朝班也）。〔唐會要二四朔望朝參〕（元和）二年十二月。御史臺奏。文武常參官。准乾元元年三月勅。如有朝堂相弔慰及跪拜。…入衙門。執笏不端。行立遲慢。至班列不正。趨拜失儀。言語微喧。穿班仗。出閤門。不卽就班。無故離位。

14 **軍烽**　用例未見。〔馮浩註補〕軍烽　疑作鋒字是。漢書南粵傳。軍鋒之冠。字習見史書。此謂刀兵之光照耀也。內亂不煩擧烽。再酌。〔史記九一黥布列傳〕項籍之引兵西至新安。又使布等夜擊。坑章邯秦卒二十餘萬人。至關。不得入。又使布等先從閒道。破關下軍。遂得入至咸陽。布常爲軍鋒。

上都　〔文選一班固西都賦〕蓋聞皇漢之初經營也。嘗有意乎都河洛矣。輟而弗康。寔用西遷。作我上都。〔唐書三七地理志〕上都。初曰京城。天寶元年曰西京。至德二載曰中京。上元二年復曰西京。肅宗元年曰上都。

15 **慟哭**　(a)〔論語先進〕顏淵死。子哭之慟（馬曰。慟。哀過也）。〔魏氏春秋〕阮籍常率意獨駕。不由徑路。車跡所窮。輒慟哭而反（世說棲逸篇注）。

(b)〔程夢星注〕用賈誼治安策中語。〔賈誼上疏陳政事〕臣竊惟事勢。可爲痛哭者一。可爲流涕者二。可爲長太息者六。…天下之勢。方病大瘇（如淳曰。腫足曰瘇）。…病非徒瘇也。又苦跛盭（師

古曰。踆。古蹲字也。…鼄。古戾字。言足蹲反戾。不可行也)。…親者或亡分地以安天下。疏者或制大權以偪天子。臣故曰非徒病瘇也。又苦踆鼄。可痛哭者。此病是也(漢書四八本傳)。

洪爐 (a)〔莊子大宗師〕今一以天地爲大鑪。以造化爲大冶。惡乎往而不可哉。〔王勃彭州九隴縣龍懷寺碑〕其建言立德。開業成務。握大柄而推造化。執洪爐而誥元始。

(b)〔程夢星注引後漢書何進傳五九〕進素知中官天下所疾。…(袁)紹等又爲畫策。多召四方猛將及諸豪傑。使並引兵向京城。以脅(竇)太后。進然之。主簿陳琳入諫曰。…今將軍總皇威。握兵要。龍驤虎步。高下在心。此猶鼓洪爐。燎毛髮耳。…大兵聚會。彊者爲雄。所謂倒持干戈。授人以柄。

*　*　*

唐代史上、安祿山の反亂以後恐らく最大の事件たる甘露の變を扱った、義山の政治詩中屈指の力作。獺祭魚的手法を思うさま驅使してかもし出されるあいまいさの妙を十二分に味わわせてくれる。大和九年(八三五)から翌開成元年にかけ、ほぼ一年を費してようやく完成したのは、熱くそして極めて危險な題材にあえてとりくんだゆえに當然のことである。

甘露の變における主要政治勢力の關係は次のように圖式化できよう。＝は協力、↕は敵對。

宦官(仇士良ら)↕(皇帝(文宗)＝宰相(李訓・舒元輿))↔朝臣
老臣(令狐楚ら)

そして、皇帝・宰相・老臣には詩中でそれぞれ褒貶が加えられても、事實上の最高權力者たる宦官だけには直接の言及が注意深く避けられているのが特徴的だ。從って、宦官の存在はあくまで作品の巨大な背景たるに止まり、登場人物三者がその背景の前で演技するかたちとなる。義山は果してこの三者をそれぞれどのように見ていたのか、その視點に對する解釋をめぐに諸說を分類整理してみる。○は肯定的視點。×は否定的視點。

視點＼人物	より微溫的		より急進的	
	B_2	B_1	A_1	A_2
皇帝	×	○	×	○
宰相	×	×	○	○
老臣	?	×	×	×

A_2 錢龍惕型(朱鶴齡・程夢星)
A_1 馮浩型
B_1 何焯型(張采田)
B_2 沈德潛型(姚培謙・屈復・紀昀)

視點未詳の劉若愚をのぞく近代注釋はすべてB_2型に屬し、義山の視點を最も微溫的に解するが、本稿もそれに同調する。特に沈德潛の說を支持したい。この詩の作者としての李義山は、殘念ながら錢龍惕の思い入れほどには急進的でなかった。しかし、義山が本當に腹を決めてこの詩を作ったことは疑う餘地がない。その他のごく少數の詩人が、まさしくおっかなびっくり、この事件に及び腰でちょいとふれてみただけなのとは譯がちがう。

1・2　大唐帝國の首都を中心に一重・二重・三重…九重にも領域

をひろげ全地上をおおう版圖すべて根元的なる至大なる聖帝の德化に歸一しており、三つの靈的存在すなわち日月星に表わされる天上界までも聖帝の大御心のままなのである。九服・三靈は皇帝の勢威をいう枕詞に等しい。しかし同時にこの壯重雄大な表現は作者が唐朝の現狀を一應よしと見ていたあかしとせねばならぬ。

3・4　このような世界において、一體またどうして、本初――後漢末の（宦官掃蕩者）袁紹――といった役どころを果すはずの人間が、自滅みたいな恰好で、劉屈氂――（宦官に）誣告された漢の皇族――と同樣に誅殺されることになってしまったのか。この如何二字のひびきは重い。前記のA型解釋では無念・痛惜。B型では叱責・詰問となる、天下太平なのに何をいらざることをと。

屈復にならって、詩を四段に分つ。以上第一段は有感二首の總序の部分。また、時間的には事變突發前の敍述。

5・6　このたび李訓鄭注一味の致しようは、むかし漢帝の御車の前に立ちふさがって、漢帝の同乘者（宦官）を泣き泣き降車させた、かの袁盎も遠く及ばぬあまりのきびしさ。その結果、畏れ多くも帝を御殿――含元殿から下り逃げ走らせる御苦勞を致させることになった。二句、馮浩は新說を提出する。安徽師大の指摘どおり、5句はまことに適解だが、6句は舊解のままがいい。それで兩句とも使役によめ、一層の的對になる。ちなみに詩語解下で、勞の字を「猶敎也」と訓ずる。ここも或いは「殿ヲ下リテ趨ラシム」とよんでしまう方がいいかもしれない。

7・8　冬至の日には天候の異變について觀察するのが常例だが、何を思って甘露が降りましたなどと僞って上奏したのか。ただただ多くの朝臣を野盜集團なみに殺戮させただけであった。馮浩および森は7句を直チニ是…滅セントナリとよみ、萑蒲を宦官集團をさすとするが、とらない。しかし、義山が本篇で恐らく故意に兩義性を持つ語彙をしばしば用いたのは確かである。蒲の字は嚴密には「苻」に作るべきだろうが、義山の誤用、誤字と言い立てるほどの問題ではあるまい。その他の文字の異同はいずれも取り上げるに足らない。

以上第二段、事變の發生。

9・10　その皆殺しでも滿足できず、生證人やら連累者やらの逮捕だとて、おふれがきが水も洩らさぬ緻密さで配られ、一旦だれかれの自供の言葉に名が出てきたが最後、いのちまでいっしょに持って行かれる。

11・12　そうした事態を招いたのも、（李訓めを）いやはや漢王朝の宰相にふさわしい風采と尊重するあまり、未來の叛逆者だと早くに見拔けなかったからだ。11句の漢相は、堂々たる風格を備えていた李訓をさすと諸說一致するが、12句の胡雛は、馮浩が仇士良または鄭注とし、以後安徽師大・陳永正など鄭注說が有力だが、果してどうか。別に確證はない。森槐南のように二句とも李訓にかけてよむことも可能。いま森に從う。

以上第三段。事變直後の狀況。

13・14　今や朝廷に出仕する官人たちは鬼籍に入るもの入らぬものと二つに部類分けされ、まがまがしい戰さののろしが大唐帝國の

首都長安の空を焦がしつづける。軍烽は兵火の象徴。馮浩説の「軍鋒」は軍の先鋒の意で、却って照の字にはそぐわない。

15・16　ほかならぬ官軍の手によって野盗なみに討滅された朝臣たちを悼んで慟哭すればいいとは、憚り多くとてもとても言えず、聲を忍んで泣くばかり。それにしてもこうした運命をもたらした大いなる天地に恨み言の一つも言わずにおれないのだ。この二句もさまざまに理解しうる。程夢星説では――國家の現狀はたしかに痛哭すべきものだったかもしれぬが、大いなる爐の火のような宰相の軍事大權の輕率な發動を恨まずにおれぬ。また森槐南は、二句の對象を李訓らとし、かれらの自業自得は慟哭にも値いせず、一切の責任は天にあるのだ、と突き放す。

以上第四段。事變によって變貌した世界。本篇は、一見すれば雜然錯綜の敍述のようだが、實は極めて明確な構成を持つと考えられる。

〈前連〉　〈後連〉

狀況描寫　主觀表出

時間の經過

一段　安定した世界←如何……（初二字は助字）

二段　事變の突發　←何成……（　〃　）

三段　事變の進行　←竟緣……（　〃　）

四段　不安定な世界←敢云……（　〃　）

（荒井　健）

有感二首之二 270　感有り二首の二

丹陛猶敷奏　丹陛に猶お敷奏するに

彤庭欲戰爭　彤庭に欲ち戰い爭う

臨危對盧植（是晚獨召故相彭陽公入）　危きに臨み盧植に對し（是の晚獨り故相彭陽公を召して入らしむ）

4 始悔用龐萌　始めて龐萌を用いしを悔ゆ

御仗收前殿　御仗　前殿を收め

兇徒劇背城　兇徒　背城に劇し

蒼黃五色棒　蒼黃たり　五色棒

8 掩遏一陽生　掩遏す　一陽生ずるを

古有清君側　古より君側を清むる有り

今非乏老成　今も老成に乏しきに非ず

素心雖未易　素心　未だ易らずと雖も

12 此舉太無名　此の舉　太だ名無し

誰瞑銜冤目　誰か冤を銜みし目を瞑さん

寧吞欲絕聲　寧ぞ絕えと欲する聲を吞まん

近聞開壽讌　近ごろ聞く　壽讌開き

16 不廢用咸英　咸英を用うるを廢せずと

校

3　對　麗本「訪」

雙行注　朱鶴齡本・全唐詩「原注」二字を冠す　馮浩本「自注」二字を冠す

入　朱本なし

5・6　殿兇　錢寫本「隊兵」と旁注し書眉に「新本。殿兇」

5　殿　毛本・麗本「隊」　稿本旁注「隊」　朱本・全唐詩校注「一作隊」

6　兇　叢刊本・類苑「見」　稿本「見」に「兵」と旁注　毛本・錢龍惕本・朱本・麗本・姚培謙本・屈復本・沈德潛本「兵」　全唐詩「兵一作兇」　馮浩本「兇一作兵」

7　棒　叢刊本・類苑・稿本・統籤「捧」

11　未　席本のみ「永」　錢寫本旁注「永」　諸本に從って改む

12　太　稿本「大」を「太」に改む

15　近　叢刊本・類苑「逃」　稿本「逃」を「近」に改む

讌　麗本「宴」

韻

下平十二庚「生・英」十三耕「爭・萌」十四清「城・成・名・聲」

同用

*

錢龍惕（　　頁參照）

朱鶴齡

8　甘露事在十一月。正冬至時。

15・16〈道源曰〉舊書（令狐楚傳）。開成元年上元。賜百寮曲江亭宴。令狐楚以新誅大臣。不宜賞宴。獨稱疾不赴。時論美之。此詩結句。蓋有譏也。（上元は上巳の誤まり。令狐楚傳參照）

朱彝尊

用意精嚴。立論婉摯。少陵詩史。又何加焉。

4　謂訓爲龐萌。亦不得已而用之也。

何焯

〔讀書記〕

9～16　古有清君側之義。本爲國家今多評本作非之老成之人。宜爲平反。豈可以涯等本非素心而聽閹人誣罔族誅之。如今日評本無日字者無名之舉乎。末句。不特譏開讌用樂。蓋深嘆文宗明知其冤。而刑賞下移。不能出聲也。

〔評本〕

唐人論甘露事。當以此爲最。筆力亦全。

6　兵徒。宋本作見徒。

15・16　結深刺當時不恤衆臣之怨。亦傷帝之制于羣凶。不得行其本志也。

姚培謙

當變起倉猝之時。而方悔信任之誤。兵仗亟於背城。一陽爲之掩抑。要非君側之不當清也。不能任老成以謀之耳。雖素心可取。而舉事無名。竟使死者銜冤。生者飲恨。豈非任用匪人之故耶。世界至此。而猶不廢讌賞。何也。

屈復

一段文宗之失臣。二段事與時。三段恨滿朝無人。末譏其無感憤之心也。

程夢星（六九八頁參照）

紀昀

〔詩說上〕直起不裝頭。是第二首也。○古有四句。兩開兩合。曲折如志。絕大神力。○結句感慨入骨。此義山法也。

二詩是慨訓注輕舉。文宗誤用。而令王涯等蒙冤。錢夕公之箋。非也。

〔詩說下〕問有感二首。前以錢夕公之箋爲非。其說焉在。曰。詩中語意固明也。第一首曰。竟緣尊漢相不早辨胡雛。第二首曰。臨危對盧植始悔用龐萌。惜文宗之誤用也。第一首。九服歸元化三靈叶瑞圖如何本初輩自取屈鄧誅。第二首曰。古有清君側今非乏老成素心雖未易此舉太無名。皆咎訓注之妄舉也。反覆觀之。無一恕詞。夫訓注皆輕躁小人。僥幸富貴。因之以君國嘗試。使幸而成功。輕則爲徐石之怙寵。重或有操卓之專權。其平日所爲。可以覆按也。乃許之以奉天討。許之以謀勇。許之以死事。不亦悖乎。至云國有重臣。不畏彊禦。倡言訓等之無辜。士良諸凶。猶未必又加其頸。尤迂而不情。夫劉從諫之敢于請三相之罪。擁兵在外耳。使其在朝。彼能收三相。復何人不能收乎。以是解古有清君側四句。可云南轅北轍矣。凡說詩當心平氣和。求其本旨。先存成見。而牽引古人以就之。是亦學者之大病也。

〔評本〕次首。法應竟起。故首二句。卽事直入。三四句。補令狐楚事。卽折入本意。五句至八句。極言其釀禍之烈。九句至十二句。兩開兩合。言晉陽之甲。古雖有之。然乃重臣正士之任。非訓注所能當也。無論心不可問。卽使心果爲國。亦宜愼重其事。明正天討。不宜于反形未著之日。出此無名之兵也。十四句至末。言徒累無辜。而仇士良等晏安如故。於事何補乎。二首反覆暢明。皆是此意。錢夕公因感明季璫禍。遂曲原訓注並義山詩而穿鑿之。失其旨矣。

馮浩

3・4 李訓原非正人。然謀誅宦官。實秉帝旨。及已敗。旁方在危懼。不得不從士良之誣。曰臨危。曰始悔。正見其實非反也。令狐楚鄭覃同召。覃未見有奏對語。然令狐亦畏禍依違。且乞罷節度使兵仗參辭之制。非可盧植比矣。

5 謂文宗入內。

6 謂士良率兵從內出。

7 此謂金吾衛士。臺府從人。蒼黃拒擊也。李德裕嘗言天下有常勢。北軍是也。而反以臺府抱關游徼抗中人以搏精兵。其死宜矣。

8 時當冬至。

10 謂今豈無可爲社稷臣者。而乃任李訓哉。如裴晉公。時猶在焉。

11・12 訓等心雖無他。謀實不善。層層吞吐。憤惋極矣。

13 謂被禍者。〈通鑑〉開成元年二月。令狐楚從容奏王涯等身死族滅。遺骸棄捐。請收瘞之。上慘然久之。命京兆收葬。仇士良潛使人發之。棄骨渭水。

14 謂朝野之中心憤痛。而不敢明言者。

15・16 舊書紀。開成二年八月。勅慶成節。令京兆尹准上巳重陽例。於曲江會文武百寮。延英奉觴宜權停。則元年之不停可見矣。舊書王涯傳。文宗以樂府之音。鄭衛太甚。命涯詢於舊工。取開元時雅樂。選樂童按之。名曰雲韶樂。樂成。上悅。賜涯等錦綵。是則咸英由其所定。今能無聞樂而悲哉。

張采田

〔辨正〕近聞二句。蓋幸帝位之未移也。注謂諷文宗。謬矣。

〔會箋〕近聞開壽讌不廢用咸英。蓋深幸帝位之未移耳。新書仇士良傳。始士良弘志憤文宗與李訓謀。屢欲廢帝。崔愼由爲翰林學士。直夜。有中使召入祕殿。見士良等坐堂上。謂曰。上不豫已久。自卽位。政令多荒闕。皇太后有制。更立嗣君。學士當作詔。愼由以死不承命。士良等默然。乃啓後戶。引至小殿。帝在焉。士良等歷階。數帝過失。帝俛首。既而指帝曰。不爲學士。不得更坐此。則當日廢立之事。固閒不容髮也。馮氏乃引王涯傳雲韶樂工事。謂帝聞樂而悲。淺矣。

沈德潛（唐詩別裁集一八）

變起倉卒。方悔信任之誤。君側非不可淸。寔不得老成之人共謀也。一時死者銜冤。生者飲恨。而開成元年上元。賜百寮讌飲。何樂而爲此耶。

3・4　董卓欲廢主另立。盧植不從。龐萌。光武素親信。後萌反。帝始有悔心。

8　事在十一月。

近代注釋

〔森槐南〕上卷三〇〇頁。〔劉若愚〕一七〇頁。〔安徽師大〕九頁。〔陳永正〕一二三頁。

＊　＊

1・2　義山の文に、〔文集一爲汝南公賀元日御正殿受朝賀表〕爰在新正。式修闕典。彤庭列位。丹陛陳儀。

1　**丹陛**　〔薛道衡高祖文皇帝頌〕臣輕生多幸。命偶興運。趨事紫宸。驅馳丹陛。〔王維上張令公詩〕珥筆趨丹陛。垂璫上玉除。

敷奏　〔書舜典〕五載一巡守。羣后四朝。敷奏以言。明試以功。車服以庸（孔傳　敷。陳。奏。進也。諸侯四朝。各使陳進治理之言）。

〔邵氏聞見後錄一五〕李義山樊南四六集載爲鄭州天水公言甘露事表云。宰臣王涯等。或久服顯榮。或超蒙委任。徒思改作。未可與權。敷奏之時。已彰虛僞。伏藏之際。又涉震驚云云。當北司憤怒不平。至誣殺宰相。勢猶未已。文宗但爲涯等流涕而不敢辨。義山之表。謂徒思改作。未可與權。獨明其無反狀。亦難矣。

2　**彤庭**　〔文選一班固西都賦〕昭陽特盛。隆乎孝成。…玄墀釦砌。玉階彤庭（李注　漢書〈九七外戚趙皇后傳〉曰。昭陽舍。中庭彤朱。而殿上髹漆）。

欻　〔文選二張衡西京賦〕神山崔巍。欻從背見（薛綜注　欻之言忽也）。義山の詩ではここのみだが、文では〔文集一爲懷州李中丞謝上表〕入祖廟而欻驚。など計六例。

戰爭　〔史記六始皇本紀〕周靑臣進頌曰。…平定海內。放逐蠻夷。日月所照。莫不賓服。以諸侯爲郡縣。人人自安樂。無戰爭之患。

3・4　〔誅王涯鄭注加恩中外德音〕朕以翼翼之心。孜孜求理。十年之內。庶政未凝。極其焦勞。志在博採。聿觀奇士。冀獲長才。取其節焉。不顧發迹。故李訓鄭注。咸得進言。望其沃心。每許造膝。邪人奸色。順非而澤。信行聽言。深心厚貌。包藏不怍。僞辨無疑。梟獍爲心。禍亂忽作。意欲翦除中外。悉去大臣。志願非常。自謀安泰。賴上天垂祐。宗社降靈。同惡雖多。姦謀竟敗。

…當危急之際。識臣節之勤。藏於予心。何日可忘（大和九年十二月）。

3　〔劉禹錫唐故相國贈司空令狐公集紀〕大和九年冬十一月。京師有急兵起。上方御正殿。卽日還宮。是夕召公決事禁中。以見事傳古義爲對。其詞讜切。無所顧望。上心嘉之。居一二日。守本官。兼諸道鹽鐵轉運使。以幹利權。既非所尙。仡仡牢讓。故復爲檢校左僕射・興元尹・山南西道節度觀察使。兼御史大夫。開成二年十一月十二日。薨於漢中官舍。〔舊唐書一七二令狐楚傳〕訓亂之夜。文宗召右僕射鄭覃與楚。宿于禁中。商量制敕。上皆欲用爲宰相。楚以王涯賈餗冤死。敍其罪狀浮泛。仇士良等不悅。故輔弼之命。移於李石。乃以本官領鹽鐵轉運等使。先是。鄭注上封置榷茶使額。鹽鐵使兼領之。楚奏罷之。曰。…前月二十一日。內殿奏對之次。鄭覃與臣同陳論訖。〔又一七三鄭覃傳〕訓注伏誅。召覃入禁中。草制敕。明日以本官同平章事。この晩に令狐楚が文宗に呼び出されたのは確かだろうが、義山が「獨召」と稱するのは言葉のあやらしい。劉學諧・余恕誠「李商隱」（一九八〇・中華書局）にいう、「看來令狐楚似乎把留宿中書的情況跟李商隱談過、而李商隱也很可能把這兩首詩呈給令狐楚看過、甚至還可能在創作中徵求過他的意見。」注目すべき見解だ。

臨危　〔文選四七袁宏三國名臣序贊〕玄伯剛簡。大存名體。…臨危致命。盡其心禮。〔杜甫送嚴武入朝詩〕公若登臺輔。臨危莫愛身。

盧植　〔後漢書何進傳五九〕進謀積日。頗泄。中官懼而思變。…言大將軍（何進）兵反。燒宮。攻尙書闥。因將太后天子及陳留王。又劫省內官屬。從復道走北宮。尙書盧植執戈於閣道窗下。仰數段珪。段珪等懼。乃釋太后。…珪等困迫。遂將帝與陳留王數十人步出穀門。奔小平津。公卿並出平樂館。無得從者。唯尙書盧植夜馳河上。王充遣河南中部掾閔貢隨植後。貢至。手劍斬數人。餘皆投河死。明日。…天子還宮。〔又盧植傳五四〕及（董）卓至。果陵虐朝廷。乃大會百官於朝堂。議欲廢立。羣僚無敢言。植獨抗議不同。卓怒罷會。將誅植。

彭陽公　〔舊唐書令狐楚傳〕（大和）九年…十月。守尙書左僕射。進彭陽郡開國公。

4　**龐萌**　〔後漢書龐萌列傳二〕光武卽位。以爲侍中。…曰。可以託六尺之孤。寄百里之命者。龐萌是也。…（萌）遂反。帝聞之。大怒。…曰。吾常以龐萌社稷之臣。將軍得無笑其言乎。老賊當族。

5　**御仗**　〔隋書百官志中〕左右衞將軍各一人。…其御仗屬官有御仗正副都督。御仗五職。御仗等員。

收　〔偶成轉韻詩562〕平明赤帖使脩表。上賀嫖姚收賊州。また後出〔重有感271〕8句參照、　頁。

前殿　〔史記六始皇本紀〕始皇以爲咸陽人多。先王之宮廷小。…乃營作朝宮。渭南上林苑中先作前殿阿房。〔三輔黃圖二漢宮條〕未央宮。漢書曰。高祖七年。蘭何造未央宮。立東闕。北闕。前殿。武庫。太倉。…未央宮周回二十八里。前殿東西五十丈。深十五丈。高三十五丈前殿曰路寢。見諸侯羣臣處也。…王莽改未央宮曰壽成室。前

殿曰玉路堂。如路寢也。〔開成改元赦文〕鄭注李訓。困緣引見。忝竊恩榮。二三舊臣。誣陷非罪。成予寡昧。抑有其由。遂使姦惡搆連。竊起前殿。

6 **兇徒** 〔杜甫秋日夔府詠懷一百韻〕舊物森猶在。兇徒惡未悛。

義山の文に再見、〔補編四爲滎陽公與昭義李僕射狀〕上黨頃集兇徒。近爲王土。これは劉稹。〔又七爲興元裴從事賀封尚書加官啓〕伏以蓬果兇徒。遂爲逋寇。これは大中年間の蓬州果州の妖賊。いずれも單なる暴徒でなく、叛逆罪の朝敵をさして用いられている。

次に事變當時の文獻における兇徒およびそれに類する語は——

(1)皇帝ないし政府の公式見解。〔誅王涯鄭注加恩中外德音〕前月二十一日。王涯賈餗舒元輿李訓鄭注李孝本韓約羅立言王璠郭行餘魏逢等。親率金吾兵仗。又郭行餘王璠領所部將健。持兵上殿。叶謀不軌。傾覆社稷。謀害中外。凡此凶徒。悉已梟戮。絕其遺類。以謝忠良。…覩衆臣宣力於急難。見禁旅摧凶於頃刻。〔開成改元赦文〕朕以寡昧。祇奉昌圖。兢業爲心。不敢自怠。…豈謂凶姦背德。宗社將危。中外叶謀。咸加顯戮。

(2)令狐楚（に代表される老臣）の見解。〔通鑑考異二一・九年十一月韓約奏甘露李訓奏未可遽宣布條〕蓋欲使宦官盡往金吾覆視。因伏兵誅之耳。故二十二日令狐楚所草制書亦云。兇渠仍請其覆視。この制書は現存しないが、舊唐書令狐楚傳（3句の注）に見える制敕と同じ。〔舊唐書令狐楚傳〕楚奏罷（鄭注上封置榷茶使額）曰。…今宗社降靈。奸兇盡戮。聖明垂祐。黎庶合安。前掲のとおりこの上奏は十二月。〔又〕楚又奏…鄭注外蒙恩寵。內蓄兇狂。首創奸謀。將興亂兆。致王璠郭行餘之輩。敢驅將吏。直詣闕庭。震驚乘輿。騷動京國。血濺朝路。尸僵禁街。史册所書。人神共憤。この上奏も同じく十二月。

(3)また事變にふれた義山の別の作では、〔哭虔州楊侍郎591〕甘心親埡蟻。旋踵戮城狐（原注　是冬舒李伏誅）。令狐楚はもちろんだが、義山も李訓らに同情あるいは愛惜の念を持っていたとは甚だ考えにくいのだ。

なお異文の「兵徒」は用例未見。

背城 〔左傳成公二年〕請收合餘燼。背城借一（杜注　欲於城下。復借一戰）。

7 **蒼黃** 〔文選四三孔稚珪北山移文〕豈期終始參差。蒼黃翻覆。淚翟子之悲。慟朱公之哭（李注　終始參差。岐路也。蒼黃翻覆。素糸也。…墨子見練糸而泣之。爲其可以黃可以黑）。乍廻跡以心染。或先貞而後黷。何其謬哉。〔杜甫破船詩〕蒼皇避亂兵。緬邈懷舊丘。

五色棒 〔曹瞞傳〕太祖初入尉廨。繕治四門。造五色棒。縣門左右各十餘枚。有犯禁者。不避豪彊。皆棒殺之後數月。靈帝愛幸小黃門蹇碩叔父夜行。卽殺之。京師斂迹。莫敢犯者。（魏志一武帝紀注）。

8 **掩過** 〔阮籍清思賦〕載雲輿之奄靄兮。乘夏后之兩龍。折丹木以蔽陽兮。竦芝蓋之三重。〔文選一二木華海賦〕氣似天霄。鬱鬱雲布。霰昱絕電。百色妖露。呵嗽掩鬱。曖昧無度（李注　呵嗽掩

鬱。不明貌。說文曰。矇。大視也。又曰。睒。暫視也)。

一陽生　〔史記二五律書〕陽氣。冬則宛藏於虛。曰冬至。則一陰下藏。一陽上舒。故曰虛。〔易復七日來復疏〕十一月。一陽生。〔杜牧郡齋獨酌詩〕今年我江外。今日生一陽。また前篇7句雲物の注に引く唐會要參照。

9　**清君側**　〔禮記曲禮上〕禮不下庶人。刑不上大夫。刑人不在君側。〔後漢書董卓列傳六二〕(卓)上書曰。中常侍張讓等。竊倖承寵。濁亂海內。…昔趙鞅興晉陽之甲。以逐君側之惡人。今臣輒鳴鍾鼓如洛陽。請收讓等。以清姦穢。

〔劉蕡賢良方正直言極諫策〕臣謹案春秋。晉趙鞅以晉陽之兵叛入于晉。書其歸者。以能逐君側之人惡人。以安其君。故春秋善之。〔劉從諫請王涯等罪名表〕涯等儒生。…安肯搆逆。訓等實欲討除內臣兩中尉。自爲救死之謀。遂至相殺。誣以反逆。誠恐非辜。…謹當修飭封疆。訓練士卒。內爲陛下心復。外爲陛下藩垣。如姦臣難制。誓以死清君側(通鑑二四五・開成元年二月)。

10　**老成**　〔詩大雅蕩〕雖無老成人。尙有典刑(箋云。老成人。謂若伊尹伊陟臣扈之屬。雖無此臣。猶有常事故法可案用也)。〔文選五左思吳都賦〕虞魏之昆。顧陸之裔。岐嶷繼體。老成奕世(劉淵林注　虞。虞文周。魏。魏周。顧。顧榮。陸。陸遜。隆吳之舊貴也)。

〔劉蕡賢良方正策〕陛下何不以聽朝之餘時御便殿。召當時賢相。與舊德老臣。訪持變安危之謀。求定傾救亂之術。塞陰邪之路。屛褻狎之臣。制侵陵迫脇之心。復門戶掃除之役。戒其所宜戒。憂其所宜憂。〔舊唐書一七二李石傳〕文宗自德裕宗閔朋黨相傾。大和七年已後。宿素大臣。疑而不用。意在擢用新進孤立。庶幾無黨。以革前弊。故賈餗舒元輿。驟階大用。

11　〔文選五二韋昭博奕論〕歷觀古今功名之士。皆有積累殊異之迹。勞神苦體。契闊勤思。平居不惰其業。窮困不易其素。〔吳隱之酌貪泉賦詩〕試使夷齊飲。終當不易心。

素心　〔文選三一江淹雜體詩陶徵君田居〕素心正如此。開逕望三益(李注　方言曰。素。本也)。〔李白酬岑勛以詩見招詩〕相知兩相得。一顧輕千金。且向山客笑。與君論素心。

12　**無名**　〔漢書一高帝紀上〕至洛陽。新城三老董公遮說漢王曰。臣聞順德者昌。逆德者亡。兵出無名。事故不成(蘇林曰。名者。伐有罪)。故曰。明其爲賊。敵乃可服(應劭曰。爲音無爲之爲。布告天下。言項羽殺義帝。明其爲賊亂。擧兵征之。乃可服也)。〔後漢書袁紹列傳六四上〕簡精兵十萬。騎萬匹。欲出攻許。…(沮)授曰。蓋救亂誅暴。謂之義兵。恃衆憑强。謂之驕兵。義者無敵。驕者先滅。曹操奉迎天子。建宮許都。今擧師南向。於義則違。…今弃萬安之術。而興無名之師。竊爲公懼之。(郭)圖等曰。武王伐紂。不爲不義。況兵加曹操。而云無名。…監軍之計。在於持牢。而非見時知幾之變也。

13　**瞑目**　〔莊子〕夫差瞑目東粵(文選五五廣絕交論及瞑目東粵李善注引)。〔後漢書宦者單超列傳六八〕桓帝初。超(徐)璜爲中常侍。…璜兄子宣爲下邳令。暴虐尤甚。…時下邳縣屬東海。汝南黃浮爲東海相。有告言宣者。浮乃收宣家屬。無少長悉考之。掾史以

下固諫爭。浮曰。徐宣國賊。今日殺之。明日坐死。足以瞑目矣。即案宣罪棄市。

銜冤　〔李白天馬歌〕嚴霜五月凋桂枝。伏櫪銜冤摧兩眉。義山の詩文になおそれぞれ一例。〔哭劉蕡76〕上帝深宮閉九閽。巫咸不下問銜冤。〔文集六代李元爲崔京兆祭蕭侍郎（澣）文〕銜冤遽往。吞恨孤居。目斷而不見長安。形留而遠託異國。屈平忠而獲罪。賈誼壽之不長。蕭澣は李訓鄭注に追われ、開成元年遂州に卒した。

14　**吞聲**　(a)生者の場合。〔後漢書宦者曹節列傳六八〕時連有災異。郎中梁人審忠以爲（中官）朱瑀等罪惡所感。乃上書曰。…不惟祿重位尊之責。而苟營私門。多蓄財貨。繕修第舍。連里竟巷。盜取御水。以作魚釣。車馬服玩。擬於天家。羣公卿士。杜口吞聲。莫敢有言。鮑照擬行路難詩〕酌酒以自寬。舉杯斷絕歌路難。心非木石豈無感。吞聲躑躅不敢言。

(b)死者の場合。〔三國吳志一六陸凱傳〕先帝每察竟解之奏。常留心推按。是以獄無冤囚。死者吞聲。今則違之。是不遵先帝二十也。〔文選一六江淹恨賦〕自古皆有死。莫不飲恨而吞聲。

15　**壽讌**　〔唐會要二九節日〕開元十七年八月五日。左丞相源乾曜。右丞相張說等上表。請以是日爲千秋節。著之甲令。布于天下。咸令休暇。羣臣當以是日進萬壽酒。…村社作壽酒宴樂。…制曰可。至天寶二年八月一日。…請改千秋節爲天長節。制曰可。〔又〕（大和）七年十月。中書門下奏請以十月十日爲慶成節。著于甲令。是月。上于宮中奉迎皇太后。與昆弟諸王宴樂。羣臣詣延英門奉觴。上千萬壽。天下州府。並置宴一日。從之。馮浩が舊唐書（一七文宗紀下）を引いて推測するように、開成元年十月十日には宮中の壽讌が例年どおりの形で行われたようである。次の史料でも同樣。〔唐會要二九節日〕（開成二）年九月。勅慶成節宜令京兆府準上巳重陽例。于曲江宴會文武官。其延英奉觴宜停。

16　**咸英**　〔周禮春官大司樂〕乃奏大簇。歌應鍾。舞咸池。以祭地示。〔禮記樂記〕大章。章之也（鄭注　堯樂名也。言堯德章明也）。咸池。備也（黃帝所作樂名也。堯增脩而用之。咸。皆也。池之言施也。言德之無不施也）。韶。繼也（舜樂名也。韶之言紹也。言舜能繼紹堯之德）。夏。大也（禹樂名也。言禹能大堯舜之德）。殷周之樂盡矣。〔文選一七傅毅舞賦〕夫咸池六英。所以陳淸廟。協神人也（李注　樂動聲儀曰。黃帝樂曰咸池。顓頊樂曰五莖。帝嚳樂曰六英。宋均曰。能爲天地四時六合之英華也）。鄭衞之樂。所以娛密坐。接歡欣也。〔孔德紹觀太常奏新樂詩〕和雲留睿賞。薰風悅聖情。盛烈光韶濩。易俗邁咸英。〔元結補樂歌十首〕之六に六英。之七に咸池あり。

〔舊唐書一六九王涯傳〕大和三年正月。入爲太常卿。文宗以樂府之音。鄭衞太甚。欲聞古樂。命涯詢於舊古。取開元時雅樂。選樂童按之。名曰雲韶樂。…押樂工獻於梨園亭。…上悅。賜涯等錦綵。〔又八音樂志〕大和八年十月。宣太常寺。準雲韶樂。舊用人數。令於本寺閱集進來者。至開成元年十月敎成。其年。太常卿李程進上。〔新唐書二二禮樂志〕文宗好雅樂。…雲韶樂。有玉磬四虡。琴瑟筑簫篪簫跋膝笙竽皆一。登歌四人。分立堂上下。童子五

人。舞者三百人。階下設錦筵。遇内宴乃奏。

＊　＊　＊

1・2　紀昀の批評どおり、第二首はまず門から玄關へ通りではなく、いきなり座敷へ踏みこむかたちをとる。大明宮は含元殿の丹ぬりのきざはしのもと、おめでたい甘露降下の上奏がまだ行われているというのに、御殿の前の彤いお庭で、にわかに戰鬪が開始された。

3・4　その戰さの夜、王朝のまさに危急存亡の時になって、帝は盧植――後漢のあの眞の忠臣に比すべき、もと宰相わが彭陽公に對面され、そこで初めて龐萌――後漢の光武帝の信任を裏切ったあの叛臣に比すべき、李訓のやからを登用したのを後悔された。李訓を龐萌にたとえたのは本心でないとか（朱竹垞）、令狐楚を盧植にたとえたのは持ちあげすぎとか（馮浩）の批判がある。しかしこの詩を書いた義山の視點は、令狐楚の立場にぴったり重なっている（劉學諧・余恕誠）。3句の雙行注は自注にちがいない。

第二首の主題は皇帝文宗（沈德潛）。第一首同樣四段に分けられる。以上第一段は、皇帝側から見た事變の開始。

5・6　近衛兵が表御殿すなわち含元殿を官軍側の手にとりもどしたが、兇惡な反逆者どもは袋の鼠と追いつめられながら大明宮の城壁を背にもう一いくさと猛り立った。5句收の字、馮浩以後はみな前殿よりの「撤收」と解するが、義山詩の用例からみれば明らかに非で、「回收」の意にちがいない。6句兇の字、毛本・麗本および朱鶴齡系各本みな「兵」に作るが、「兵徒」は見なれぬ言葉であり、やはり底本および錢謙益本など宋版系テキストに從うべきであろう。また叢刊本が「見」に作るのは形訛。さて、兇徒を宦官ひいてはその率いる禁兵と解するのは馮浩にはじまる。だが、宦者の親玉仇士良は禁兵の總司令すなわち神策軍中尉である。正規の統率者の命令で出動した近衛軍團をさして、もし〝兇徒〟と呼んだならば、當人の首はそれこそ飛ぶのではないか。ましてや事變のあとの公けの雰圍氣のなかでそんな發言をするのは氣違い沙汰だ。唐朝の詩人の公表作品でそれが可能だという、馮浩の勘の狂いはどうしたことだろう。そもそも義山（＝令狐楚）の意識において、この事變における兇徒とは李訓集團以外にありえなかった。なお姚培謙は、御仗・兵徒で兵仗と解し、5・6句を敵味方入り亂れてのいくさとする。

7・8　かくて例の曹操の用いたような蒼やら黃やら五色の殺人棒があわただしく頭上に飛び交い、いつ誰の番が來るやも知れぬ不安きわまる地上に變じ、それにつれて天候も異常を來して、陰の氣が極限に達し陽の氣が芽生えるはずの冬至の日に、一陽來復が重苦しく押えつけられ妨げられた。すべては九服・三靈の支配者たるべき天子の責任たらざるをえない。

以上第二段。皇帝の立場から見た事變の結果。

9・10　古來、君側の奸人をきれいに一掃した例は珍しくないし、現に今も、その實行にふさわしい老練の重臣にはことかかぬはず。たとえばそれあの彭陽公がなぜ起用されなかった。文宗の老臣輕視は、どうやら大和七年に始まったのではなさそうで。早く劉蕡

の對策にもわざわざ特筆されているほどだ。義山はここでも劉氏の見解に影響されているらしい。

11・12　平素からの帝への忠誠の心にひびが入りましたと、そこまでは申しませんけれど、それにしても、この度のなされ方は、堂々と大義の旗印を掲げられようともせぬ、あまりにも無名の師的な暴擧でしかなく、かえすがえすも口惜しいかぎり。11句の主體はわれわれ――作者をふくめての士大夫層とみなす。われわれの日頃の心持はなおいまだ變ってはいないが……、というのである。新舊の諸注釋すべてこれを李訓の本心と解するが、それでは「未易」とうまく嚙み合わない。何よりも義山は李訓の〝素心〟など決して認めていなかった。ただ、本稿の解の不安は、「此擧」なる表現が皇帝に對してあまり無遠慮すぎるのであるまいかという點にある。ここは本篇二首を通じ、最もよみの確定しにくい部分だ。何焯はまた別に、一解を立て、素心の主體を王涯とし――古來國家のために君側を清めるべしとされ、今も任に耐えうる老臣は多い、ところが王涯は忠誠心を疑われ、宦官のために無實の罪で族誅されるという名分なき行爲がなされながら、老臣は無力で涯の名譽回復もできぬとは。

以上第三段。朝臣ないし士大夫側からの帝への批判。その一、誰とともに行動されるべきだったろうか。

13・14　無實の罪をきせられ殺戮された朝臣たち、誰が安んじて瞑目する者がいるだろうか。死んでも死にきれぬかれらは、絶え入りそうにかぼそい恨みの聲を、どうして呑みこんでしまうはずがあろう。ただし、14句を諸説はおおむね生者の行爲とする――生き殘った者たちは、たとえ消え入りそうな聲にしても、どうして上げずにおれよう。

15・16　事變の記憶もまだ生々しいこのごろ、今上皇帝誕生日、慶成節の壽宴が宮中で例年どおり開かれ、黃帝や帝嚳の手に成る咸池・六英にも比すべきすばらしい雅樂（作者はかの王涯なのだ）が、相變らず壯麗に演じられている、と聞く。その裏の意味についておよそ四說。(a)帝の心中はお察しするだにいたわしい（馮・森・安徽師大）。(a′)未だに帝位に止まっておられるだけでも幸いな（張）。(b)天下のひっくり返らんばかりの大事件の直後だというに、また呑氣なこと（道源・朱・姚・屈・沈德潛・陳永正）。(c)仇士良の奴ばらはのほほんじゃないか（紀昀）。(a)(b)兩義を兼ねるとするのが何焯。この二句のみに注目すればいずれの說でも可。要は帝に對する作者の眼を、作品の文脈に照らしてどうとらえるかにかかる。いま(b)說をとりたい。

以上第四段。朝臣側からの帝への批判。その二、多數の犧牲者が出たのを忘れ、反省の氣配がないではないか。第二首は第一首よりも作品構造は單純のようで、前半二段を狀況描寫、後半二段を主觀表出とみることもできよう。壽讌が慶成節のそれとすれば、本篇二首が成ったのは開成元年の十月半ば以降か。

（荒井　健）

重有感 271　重ねて感有り

玉帳牙旗得上游　玉帳牙旗　上游を得

安危須共主分憂　安危須く主と憂を分つべし

竇融表已來關右　竇融の表は已に　關右より來る

4 陶侃軍宜次石頭　陶侃の軍は宜しく　石頭に次るべし

豈有蛟龍愁失水　豈蛟龍の水を失うを愁うる有らんや

更無鷹隼與高秋　更に鷹隼の高秋を與にする無し

晝號夜哭兼幽顯　晝號夜哭　幽顯を兼ぬ

8 早晩星關雪涕收　早晩　星關　涕を雪ぎて收めん

校

0 唐詩鼓吹七・唐音一〇・唐詩類苑一一九（人部感遇類）

1 游　朱鶴齡本・全唐詩「游」　錢謙益本「游」を「遊」に改む

2 分　唐音・叢刊本・類苑・統籤・毛本・錢謙益本・錢惕龍本・朱本・全唐詩・麗本「君」　稿本朱筆旁注「分」

5 愁　唐音「曾」　鼓吹「曾一作長」　麗本「曾」（校注「曾一作愁」）　稿本「愁」に作り朱筆旁注「長一作曾」　朱本・全唐詩校注「一作曾一作長」

7 哭　唐音「泣」　麗本「泣」（校注「泣一作哭」）

韻

下平十八尤（游・憂・秋・收）十九侯（頭）通用

*

錢龍惕

太和九年十月。以前廣州節度使王茂元爲涇原節度使。逾月。李訓事作。茂元在涇原。故曰得上游也。昭義節度使劉從諫。三上疏問王涯等罪名。內官仇士良聞之惕懼。(一)故曰竇融表已來關右也。初未(二)獲鄭注。京師戒嚴。涇原鄜坊節度使王茂元蕭弘。皆勒兵備非常。故曰陶侃軍宜次石頭也。宦豎知訓事連天子。(四)相與怒嘖。(五)帝懼。僞不語。(六)故宦人得肆志殺戮。則蛟龍而愁失水矣。(七)曰豈有者。諱之也。傳曰。見無禮於其君者。如鷹鸇之逐烏雀也。奄豎恣橫。(八)擧朝脅息。曰更無者。傷之也。(九)至于晝號夜哭。雪涕星關。則欲爲包胥救楚之事。而時無方伯。徒託空言。嗚呼。(十)悲夫。

朱鶴齡（錢龍惕箋を引く。異同を記す）

(一)內官→なし。(二)惧→懼。(三)未→なし。(四)宦豎知訓→士良輩知。(五)怒嘖→怨憤。(六)故→なし。(七)愁→なし。(八)傳曰…恣橫→涯等既死。(九)曰…也→諸藩鎭亦皆觀望不前。誰爲高秋之鷹隼。快意于一擊乎。曰更無者。傷之亦望之也。(十)則欲…嗚呼→而感之者益深。

〔補注〕潘畊曰。晉天文志。五車南一星。曰天關。亦曰天門。日月所行也。主邊事。又天星會通云。天街北有天關。主邊防關塞。星關。決當指此。時王茂元節度涇原。領邊鎭。義山深望其能淸君側之惡。故曰早晩星關雪涕收也。

朱彝尊

藩鎭勒兵。止以自衞。莫興勤王問罪之師。故曰須共。曰宜次。勉之。激之。亦春秋責備之旨。非刺之也。落句。終是望之之詞。作感慨解便淺。

0 感甘露之事也。

3 指劉從諫。

4 謂王茂元等。

何焯

〔讀書記〕第六。用見無禮于君者。如鷹鸇之逐鳥雀也。第七。幽謂王涯等十一族。顯謂士大夫不附宦官者也。末句。星關二字未詳

（評本　本條なし）。

〔評本〕此篇感涇原鄜坊二帥及助宦爲聲勢。王誅不成。搢紳塗地。職由再失事機也。第三。責蕭宏外屬。反不如一劉從諫。○逼眞工部合作。

0 第三。指昭義劉從諫。此責藩鎭諸公也。

陸鳴皋

甘露之事。昭義節度劉從諫疏問王涯等罪名。仇士良懼。而諸鎭未有擧動。詩蓋爲此作也。言擁節而居要地。當共天子安危。況已有問罪之表。則宜有率師以淸惡者。第五句。謂文宗受制中人。而反言以存體。第六句。則慨無人效一擊之力也。星關。猶天門。言禁闕也。雪涕。猶破涕。蓋謂閹寺橫逆。禁門縱弛。人鬼憤泣。安得早晚收閉而爲之破涕乎。仍望之也。

徐德泓

此詩不惟抒忠憤之思。且著當時藩鎭之失。不激不尤不露。纏綿沈欝。直入杜陵突奧。匪僅得籓籬而已。第六句。與字讀去聲。言無有與聞國事者。始見意義。星關。若主邊塞之臣說。則雪涕收當解作昭雪而收其涕。三字連合。反覺生粘。而意與韻脚。亦俱受雪字之病而不醒不穩矣。或解作破涕而收之。則涕已破而收字又贅矣。故收字應屬之門禁。而星關不係乎邊臣。上解是也。

陸崑曾

文宗憤宦官弑逆。陰與訓注謀除之。訓以謀之不臧。致有甘露之變。天下皆疾訓注之奸邪。不知其謀則舛。其理則正。義山五言二詩。已排衆論而昭雪矣。此則深咎內外文武。先既不能討賊。及劉從諫表上。又無接應之人。爲可歎也。按唐兵制。內外相維。沿邊盡立節度府。原以防京師一旦有變。勒兵救援耳。故曰玉帳牙旗得上遊。安危須共主君憂也。涯餗等見戮後。士良迫脇天子。下視宰相。其氣益盛。然劉從諫表上。誓淸君側。若輩卽震慴不敢復肆。使諸鎭乘此。共興問罪之師。則閹人不難授首。而涯等之冤得白矣。故曰竇融表已來關右。陶侃軍宜次石頭也。史稱數日之閒。生殺除拜。皆決於中尉。上不豫知。是蛟龍而失水矣。曰豈有者。諱之之辭也。士良雖以謀逆誣涯餗。然未諫專殺。文宗顧問覃楚。設覃楚當日。能持公論。則罪有攸歸。乃依阿取容。使肆慘毒。孰是爲鷹隼之一擊者乎。曰更無者。羞之之辭也。藩鎭坐視於外。宰輔依違於中。至使晝號夜泣。人鬼皆愁。何時得淸君側之惡。而收此涕淚也哉。此我之所以重有感也。五言二詩附後。（正文略）

姚培謙（錢龍惕箋を引かず）

李訓事作。時王茂元爲涇原節度使。故曰上遊。昭義節度使劉從諫上疏。問王涯等罪名。仇士良聞之惕懼。竇融表。指劉。陶侃軍。謂茂元在涇原。亦勒兵備非常。故以是望之也。時事如此。要之果是蛟龍。寧愁失水。惜訓注非其人耳。高秋鷹隼。非茂元輩是望而誰望耶。更無者。言豈更無其人也。晝號夜哭雪涕星關。義山之感憤深矣。

屈復（錢龍惕箋を引く）

此首卽杜之諸將也。亦不能如杜之深厚曲折。而語氣頗壯。用意正大。晚唐一人而已。諸選皆不錄者。採春花而忘秋實也。○此篇甘露變後之作。猶望其興復也。既得上將。勢足有爲。當分主憂。何竇融之表已來關右。而陶侃之軍不次石頭。故奄宦得志。當時如果興師問罪。蛟龍必不至于失水。其如時無英雄。誰能爲高秋之鷹隼乎。今日之號哭。神人共憤。如有忠臣。星關可雪涕而收。望之至也。

程夢星（錢龍惕箋を引く）

王茂元雖與蕭弘勒兵。僅可以備非常。若責以淸君側之姦。難矣。卽劉從諫屢請王涯罪名。亦不過三上奏疏。未敢遽興晉陽之甲。何乃于茂元望之深耶。歷觀前史。以淸君側起兵者。東漢之董卓。東晉之蘇峻王敦。挾震主之威。冒不義之名。皆國賊耳。豈社稷臣耶。義山之意。蓋深有慨于文宗受制家奴之語。而姑爲此將在外不受君命之論。以寄其憤忿也。考是時文宗太和九年茂元在涇原。義山猶爲兗海觀察使崔戎掌書記。然是時已受茂元之知。其祭茂元文云往在涇川。始受殊遇。其明證也。殆爲此事外之論。以嘅知己之不得行其志矣。

紀昀

〔詩說上〕豈有更無。開闔相應。上句言無受制之理。下句解受制之故也。揭出大義。壓伏一切。此等處是眞力量。夕公以豈有爲諱之。非也。

〔評本〕豈有更無。開合相應。上句言無受制之理。下句解受制之故也。錢夕公以豈有爲諱之。亦非。大抵錢氏論詩。皆先存成見。而矯揉古人以從之。牧齋箋杜詩亦然。兼幽顯。言神人共憤也。

馮浩

此篇專爲劉從諫發。錢龍惕兼王茂元言之。徐氏（逢源？）又兼蕭弘言之。皆誤矣。舊書紀。（開成元年三月）昭義節度使劉從諫三上疏問王涯罪名。仇士良聞之惕懼。從諫遣焦楚長入奏。於客省進狀。請面對。上召楚長。慰諭遣之。新書（二一四）從諫傳。李訓先約從諫誅鄭注。及甘露事。宰相皆夷族。從諫不平。三上書請王涯等罪。時宦豎得志。天子弱。鄭覃李石執政。藉其論執以立權綱。（二〇七）仇士良傳。從諫言謹修封疆。繕甲兵。爲陛下腹心。如姦臣難制。誓以死淸君側。書聞。人人傳觀。士良沮恐。帝倚其言。差自强。故三四言旣遣人奉表。宜卽來誅殺士良輩也。舊書（一六九）訓注傳贊曰。苟無藩后之勢。黃屋危哉。藩后專指從諫也。史稱士良輩知事連天子。相與惡憤。帝懼。僞不語。數日之內。生殺除拜。皆由兩中尉。天子不聞也。故五句痛其受制。六句謂除從諫外。更無人矣。若王茂元。史言其以多財爲中人掎摭。方惴惴焉出家貲賂兩軍得不誅。而反獲封。蕭弘以太后弟得顯位。實庸人耳。安得以陶侃比之哉。且新書云。初未獲注。京師戒嚴。茂元蕭弘。皆勒兵備非常。是二人方爲中人所用。乃夕公改初未獲注爲初獲鄭注。以曲成其論。尤是非顚倒矣。得上游。似借用漢書匈奴傳從上游來厭人之義。以喩懾服中官也。

3　關右卽隴右。（竇）融所牧爲關隴以西之地。謂表自關右而來。以比能知帝意。遣人入奏。責讓中官也。

7　言神人皆望之。

8　按天官星占曰。北辰一名天關。一名北極。紫宮太乙座也。晉書天文志。東方。角二星爲天關。其間天門也。其內天庭也。故黃道經其中。房四星。爲明堂。天子布政之宮也。中間爲天衢。爲天關。黃道之所經也。似皆可言星關。以喻皇居。而張平子週天大象賦。天關嚴扃於畢野。諸王列藩於漢濤。用之亦合。晉書劉隗傳。入宮告辭。帝雪涕與之別。此言文宗悲憤不自勝。冀其來誅內官。而乃得收痛淚也。舊引史記天官書。兩河天關閒爲關梁。正義曰。關邱二星在河南。天子之雙闕。諸侯之兩觀。金火守之。主兵戰鬬下。雖似合本事。却與下三字不可貫。必非。

張采田

〔辨正〕起句言昭義據天下之上游。卽當安危與共。領聯正意。腹聯言已得上游。豈愁失勢。奈何無分憂王室之人。如鷹隼之逐惡人也。結則望其速來誅君側之惡。雪人神之憤耳。此篇專爲劉從諫發。馮注最確。惟句下解釋。尙未融洽。故爲拈出。至紀評更失詩意。不足與辨矣。

〔會箋〕此詩專爲劉從諫發。馮說甚精。錢夕公兼王茂元言之。徐氏又兼蕭弘言之。皆誤也。不可從。又案邵氏聞見後錄云。李義山樊南四六集載爲天水公言甘露事表云。（中略。　頁參照）亦難矣。此表惜已佚。頗可與詩參觀。以韓昌黎之學識。尙罪伾文。杜牧之輩。更無論焉。義山持論。忠憤鬱盤。實有不同於衆論者。乃紀曉嵐撰四庫提要。於此詩猶復肆意譏訶。何歟。

廖文炳

此詩追憶前功而作也。首云玉帳牙旗。得居上流之地。安時之危。乃爲人君分憂也。何以見之。使叛逆之徒如竇融之稱臣獻馬。勤王之旅如陶侃帥衆定盟。當此時。權勢獨持。豈有蛟龍失水之嘆。小人俱遯。自無鷹隼橫秋之嗟。然所以得此者豈易致哉。蓋晝夜號哭。如包胥之眞心。內迷暗而外顯見。感秦王出師救之。乃能崇朝收復星關之地。雪拭涕淚而見太平也。吾之成功亦猶是。又何負於時哉。

王淸臣・陸貽典

首言玉帳牙旗。得居上流之地。安危之事。皆當爲人主分憂也。如竇融之表。來於關右。後有請討隗囂之擧。陶侃之軍。次於石頭。隨建削平蘇峻之功。事權在握。當無慮蛟龍之失水。小人俱遯。自無容鷹隼之橫秋。且如包胥乞師。依庭牆而晝夜號哭。不崇朝而復楚。則早晚之間。當拭涕淚。而見太平矣。此爲當時之節鎭期之也。

顧璘（唐音批）

此篇所言何事。次聯粗淺。不成風調。古人紀事必明白。但至褒貶乃隱約。未有如此者。

胡以梅（國事類）

是擧也。翦除國賊。本受密旨。使其事擧。有造唐室。乃閹主臨事懞懂。始不卽臨左仗。繼又隨中官入內。使兵自內出。一敗塗地。冤滋流毒。不濟之告。不獨訓輩也。顧訓注傾邪小人。素心妄譎。王涯貪權固寵。榷茶構怨。不遠邪佞。賈餗脂韋其閒。舒元輿等。性俱詭激。乘險蹈利。與訓相結。不爲衆與。所以受禍之後。人情

反以假手爲快意者。實失好惡之正。故義山集中。有有感二首獨哀之。此云重有感者。專爲當時藩鎭不能聲罪致討而責之。亦可謂詩史也已。是時王茂元爲涇原節度。蕭弘爲鄜坊節度。皆處上游之勢。則安危須共主君之憂矣。當時昭義節度劉從諫。三上疏問王涯罪。內官仇士良聞之惧惕。從諫又遣焦楚長入奏于客省。進狀請面對。上召楚長慰諭遣之。則藩鎭閒亦有不平而起者。既如竇融有表來關右。則近鎭何不學陶侃次軍京師乎。若天子得藩鎭之兵。如蛟龍之得水。有何愁慮。乃諸鎭並無鷹隼之擊與于高秋之候。所以使含冤之衆。晝則人號。夜則鬼哭。幽明皆是。望星關知誅邪之無人。方始收淚。豈天意長奸歟。

近代注釋

〔森槐南〕上卷三一二頁。〔安徽師大〕一二頁。〔陳永正〕五八頁。

*　*

0　義山の有感二首および重有感と好對照をなすのは、白樂天が甘露の變を詠じた二作である。〔九年十一月二十一日感事而作其日獨遊香山寺〕禍福茫茫不可期。大都早退似先知。當君白首同歸日。是我青山獨往時。顯索素琴應不暇。憶牽黃犬定難追。麒麟作脯龍爲醢。何似泥中曳尾龜。〔卽事重題〕重裘煖帽寬氈履。小閣低窓深地爐。身穩心安眠未起。西京朝士得知無。樂天はあたかも事變の立役者の舒元輿・郭行餘らと個人的な交際があった。

1・2　〔柳宗元謝襄陽李夷簡尙書委曲撫問啓〕伏惟尙書鶚立朝端。風行天下。入統邦憲。出分主憂。捴此上游（孫汝聽注　上游。猶言重地也。見漢書項羽傳）。式是南服。

1　**玉帳**　〔顏之推觀我生賦〕守金城之湯池。轉絳宮之玉帳孝元自曉陰陽兵法。初聞賊來。頗爲厭勝。被圍之後。每歎息知必敗。唐代では節度使の幕府をいう習語となる。〔武元衡奉酬嚴司空荆州見寄詩〕金貂再入三公府。玉帳連封萬戶侯。〔杜牧懷鍾陵舊遊詩四首之一〕玉帳軍籌羅俊彥。絳帷環珮立神仙。義山の文に、〔文集四獻河東公啓二首之二〕況某跡忝諸生。名非前哲。尙遙玉帳。已賚金錢。

牙旗　〔文選三張衡東京賦〕戈矛若林。牙旗繽紛（薛綜注　兵書曰。牙旗者將軍之旌。謂古者天子出。建大牙旗。竿上以象牙飾之。故云牙旗）。〔劉長卿獻淮寧軍節度使李相公詩〕建牙吹角不聞喧。三十登壇衆所尊。義山の文に、〔補編九爲滎陽公桂管補逐要等官牒・王政〕右件官。一心事我。三歲食貧。…宜携刀筆。從我牙旗。

上游　(1)〔漢書三一項籍傳〕羽乃陽尊懷王爲義帝。曰。古之王者。地方千里。必居上游（文穎曰。居水之上流也。游或作流。師古曰。游卽流也）。徙之長沙。都彬。〔杜甫舟中苦熱遣懷詩〕似聞上游兵。稍逼長沙館（九家注　上游。江之上流也）。

(2)〔漢書九四匈奴傳下〕建平四年。單于上書願朝五年。時哀帝被疾。或言匈奴從上游來厭人（服虔曰。游猶流也。河水從西北來。故曰上游也。師古曰。上游。亦總謂地形耳。不必係於河水也。厭音一涉反）。自黃龍竟寧時。單于朝中國輒有大故。〔劉長卿湖南使還留辭辛大夫詩〕天子無南顧。元勳在上游。義山の文に、〔補編三爲滎陽公上荆南鄭相公狀〕今月七日。赴任桂林。不惟雜俗。實介遐荒。然處於上游。嘗是重德。〔又六上漢南盧尙書狀（錢振倫

箋　盧簡辭也。舊唐書本傳。大中初。檢校刑部尚書襄州刺史山南東道節度使〕〕尚書三兄。鎭靜上游。儀刑羣后。

2　**安危**　〔書畢命〕邦之安危。惟茲殷士〔孔傳　言邦國所以安危。惟在和此殷士而已〕。〔杜甫諸將五首之五〕西蜀地形天下險。安危須仗出羣材。

分憂　〔三國魏志一五賈逵傳〕太祖征馬超。至弘農。曰。此西道之要。以逵爲弘農太守。召見計事。大悅之。謂左右曰。使天下二千石皆如賈逵。吾何憂。〔晉書一宣帝紀〕（黃初）五年。天子南巡。觀兵吳疆。帝留鎭許昌。改封向鄉侯。轉撫軍。假節。領兵五千。加給事中錄尚書事。帝固辭。天子曰。吾於庶事。以夜繼晝。無須臾寧息。此非以爲榮。乃分憂耳。〔孟浩然同獨狐使君東齋作〕郎官舊華省。天子命分憂。〔文集一代彭陽公遺表〕周旋五經鎭守。惟切分憂。前後兩歸闕庭。皆非久次。そのほか義山の文にも頻見。

3・4　〔晉書七〇甘卓傳〕大將軍王敦開府武昌。永昌元年。以誅劉隗爲名擧兵。…遣使告卓。卓乃僞許。而心不同之。…參軍李梁說卓曰。昔隗闢亂隴右。竇融保河西。以歸光武。今日之事。有似於此。…（鄧）騫謂梁曰。光武創業。中國未平。故隗闢斷隴右。竇融兼河西。各據一方。鼎足之勢。…今將軍之於本朝。非竇融之喩也。襄陽之於大府。非河西之固也。…卓既素不欲從敦。得（樂）道融說。遂決曰。吾本意也。…遣參軍司馬讚孫雙奉表詣臺。參軍羅英至廣州。與陶侃剋期。…征西將軍戴若思在江西。先得卓書。表上之。臺內皆稱萬歲。…陶侃得卓信。卽遣參軍高寶率兵下。

3　**竇融**　〔馮浩注〕後漢書（竇融列傳一三）竇融行河西五郡大將軍事。聞光武卽位。心欲東向。遣長史奉書獻馬。帝授融涼州牧。融深知帝意。乃與隗囂書。責讓之。砥礪兵馬。上疏請師期。帝深嘉美之。

關右　〔文選二七王粲從軍詩五首（李注　魏志曰。建安二十年三月。公西征張魯。魯及王子降。十二月至自南鄭。是行也。侍中王粲作五言詩。以美其事）之一〕相公征關右。赫怒震天威。〔弘執恭劉生詩〕英名振關右。雄氣逸江東。

4　**陶侃**　〔馮浩注〕晉書（六六）陶侃傳。蘇峻作逆。京都不守。溫嶠要侃同赴朝廷。因推爲盟主。侃戎服登舟。與溫嶠庾亮。俱會石頭。諸軍與峻戰。斬峻於陣。

5　**蛟龍**　〔管子形勢解〕蛟龍。水蟲之神者也。乘於水。則神立。失於水。則神廢。人主。天下有威者也。得民則威立。失民則威廢。蛟龍待得水而後立其神。人主待得民而後成其威。故曰。蛟龍得水而神可立也。〔楚辭惜誓〕黃鵠後時而寄處兮。鴟梟羣而制之。神龍失水而陸居兮。爲螻蟻之所裁。

6　**鷹隼**　〔禮記月令〕孟秋之月。…鷹乃祭鳥。用始行戮。〔左傳文公十八年〕見無禮於其君者誅之。如鷹鸇之逐鳥雀也。〔周禮春官司常〕掌九旗之物名。各有屬以待國事。…鳥隼爲旗。…州里建旗（鄭注　鳥隼。象其勇捷也）。〔漢書七七孫寶傳〕立秋日。…曰。今日鷹隼始擊。當順天氣取姦惡。以成嚴霜之誅。〔文集一爲濮陽公陳情表〕隼旗楚峽。出以分憂。熊軾郎城。忽思通貴。

高秋　既出、　　頁。ただし、ここは秋ニ高シとよむべきか

もしれない。

7 **晝號夜哭**　〔禮記檀弓下〕穆伯之喪。敬姜晝哭。文伯之喪。晝夜哭。孔子曰。知禮矣。〔淮南子本經訓〕昔者蒼頡作書。而天雨粟。見夜哭。〔劉隗奏劾周莚劉胤李匡〕冤魂哭于幽都。訴靈恨于黃泉。…故有隕霜之應。夜哭之鬼。伯有晝見。彭生爲豕。刑殺失中。妖眚並見。

幽顯　〔莊子庚桑楚〕爲不善乎顯明之中者。人得而誅之。爲不善乎幽閒之中者。鬼得而誅之。明乎人。明乎鬼者。然後能獨行（郭象注　幽顯無愧於心。則獨行而不懼）。〔王勃廣州寶莊嚴寺舍利塔碑銘〕天人合契。幽顯同心。傾家奉賄。破產移琛。

8 **早晚**　詩語解下に、猶言幾時也、張相匯釋六に、猶云何日也。

星闕　天闕天闕その他類似の語彙は多いが、用例未見。〔文選五〇范曄宦者傳論〕易曰。天垂象。聖人則之。宦者四星。在皇位之側（李注　仲長子昌言曰。天文宦者四星。在帝座傍）。故周禮置宦。亦備其數。閹者守中門之禁。寺人掌女宮之戒。又云。王之正內者五人。月令。仲冬。閹尹審門閭。謹房室。〔白居易司天臺儆今也〕昔聞西漢元成閒。上陵下替謫見天。北辰微暗少光色。四星煌煌如火赤。耀芒動角射三臺。上臺半滅中臺坼。是時非無太史官。眼見心知不敢言。明朝趨入明光殿。唯奏慶雲壽星見。

雪涕　〔漢書四一樊噲傳〕先黥布反時。高帝嘗病。惡見人。…羣臣絳灌等莫敢入。十餘日。噲乃排闥直入。大臣隨之。上獨枕一宦者臥。噲等見上。流涕曰。…不見臣等計事。顧獨與一宦者絕乎。且陛下獨不見趙高之事乎。高帝笑而起。〔劉蕡對策〕故樊噲排闥而雪涕。袁盎當車而抗辭。

＊　＊　＊

內容の激越さにもかかわらず、意識的な韜晦の措辭が表には並び、もし本篇だけを單獨に突きつけられるならば、作者の眞意があるいは摑みがたいかと思われ、さればこそ唐詩鼓吹の注者たちは全く見當はずれの發言をしている。「不激不尤不露」（徐德泓）とも評されるゆえんであろう。錢龍惕以下、本集の注者たちは、當時の節度使の奮起を促しまたはその弱腰を嘆くという大筋では意見一致、また3句は劉從諫の行動をさすとみるが、對象たるべき節度使の特定については凡そ六說。

(1)劉從諫と王茂元　（姚培謙）
(2)劉從諫と王茂元・蕭弘（錢龍惕・朱鶴齡・朱彝尊・胡以梅）
(3)劉從諫と他の節度使　（何焯・陸鳴皋・陸崑曾）
(4)節度使全般　（徐德泓・屈復）
(5)王茂元　（程夢星）
(6)劉從諫　（馮浩）

最も後發の程・馮はよりスッキリした形の單獨對象說だが、對象を一人にしぼるとすればむろん馮注の方がすぐれ、近代注釋すべて馮注による。もし複數對象說の方が當っていた場合、王茂元ら以外に義山の視野に入っているかもしれない節度使・在職期閒を念のためあげておく。任地が比較的首都に近い要衝にあることをめどとする。

邠寧　（邠州）　李用　（八三三―三七）

鳳翔　（鳳翔府）　陳君奕（八三五－四一）
河中　（河中府）　李聽　（八三六－三九）
河東　（太原府）　李載義（八三三－三七）
山南西道（興元府）　令狐楚（八三六－三七）

とりわけ期待を寄せたいのは、やはり何らかの縁故を持つ相手なのが自然だろう。その意味では、令狐楚のほか、義山がごく最近幕下にいた可能性のある、豪勇の武將李載義にも相手たる資格が備わる。舊唐書一八〇・新唐書二一二本傳および〔過故府中武威公交城舊莊感事527〕參照。

白樂天と義山との落差は、すでに大和三年（八二九）以來事實上官界から隱退していた老名士と、任官はおろか登第もしていない血氣盛ん功名心あふれる青年文士と、兩者の立場にも關係しよう。樂天自身もかつては新樂府（司天臺歌をふくむ）や秦中吟を書いたのだったが。しかし、それにしても本篇こそ現存の義山の集中最も急進的、危險思想の持ち主と嚴しく批判されても仕方のない作品で、中央政府部内の癌を切り取るため、地方の軍閥の蹶起、首都への進軍を暗に呼びかけているのだから。あるいは先の二篇の完成以後、情勢がますます思わしくないのに焦慮したのか。製作年月もそう隔ってはいないだろう。すぐれた御用學者紀昀が眼に角を立てるのは當然だ。「重有感一首所謂竇融表已來關右陶侃軍宜次石頭者。竟以稱兵犯闕望劉從諫。漢十常侍之已事。獨未聞乎。鶴齡又引龍惕之語。不加駁正。亦未免牽就其詞。」（四庫全書李義山詩注提要）

1・2　玉帳・牙旗・上游・分憂と、首連は唐代の節度使に關する語彙で埋められる。玉帳をめぐらし牙旗をおっ立て要害の地を占めているからには、王朝の安危にかかわる一大事出來となれば本來の責務を自覺して君と憂いを分ち持たねばならぬのだ。上游を字義どおりに解すればむろん河川の上流に限定されるが、義山をふくめ唐代詩文の用例では、むしろ節度使の任地たる軍事上の重要據點一般を指す方が普通のようである。從って昭義節度使劉從諫の本據たる潞州すなわち上黨をふくめて考えることは可能。ちなみに杜牧の文にいう、〔賀中書門下平澤潞啓〕伏以上黨之地。肘京洛而履蒲津。倚太原而跨河朔。戰國時。張儀以爲天下之脊。建中日。田悅名曰腹中之眼。2句主分憂を叢刊本などは「主君憂」に作るが、分憂と端的に記す底本がすぐれる。

3・4　むかし竇融が反逆者隗囂の罪を責め征伐したいとの上疏を隴右の地から光武帝に對しさし出した、（それと同じような上表が現在）すでに關右の地から屆けられた、それなら今度はむかし陶侃が反亂者蘇峻打倒のため都にほど近い石頭の地に正義の軍を會した、（それと同じような義軍が直ちに）然るべき場所に集結さるべきだ。馮浩は史書に忠實に關右卽隴右と解する。安徽師大のように關右卽關西ないし關内と解して「關右ニ來ル」とよむ方が實際には作品の文脈によりふさわしいが、それでは竇融の列傳の記載と食いちがってしまう。義山がここで竇融の故事と陶侃の故事とを結びつけたのは、晉書甘卓傳に示唆されたのかもしれない。馮注によれば、竇融＝劉從諫＝陶侃となる。劉從諫の上表に

ついては有感二首之二の清君側の注参照、七二〇頁。

5・6　みづちや龍が陸に上った河童みたいに水から引き離されるのを憂慮するなど、到底起りえぬはずのことだのに……。（今や皇帝の大權は失われたに等しく、失水の蛟龍のごときありさま。にもかかわらず）タカやハヤブサが秋空高くよりともどもに小鳥に襲いかかる、（そのように君側の姦臣ばらを一掃せんとハヤブサの旗印を掲げる節度使の）姿はとんと見當らないのだ。6句與高秋はよみにくい。徐德泓に從って高秋ニアズカルとよむのも苦しく、5句愁が曾あるいは長と助字になるテキストを採ってもよみにくさは變らぬ。張相匯釋四には本詩を引いて「與。猶擧也」の訓をつけるが、望文生義のおそれあり。

7　さて事變の結果、冤罪をこうむり幽冥の境に沈んだ者、なおこの世に生き長らえて悲痛の思いを味わう者、晝は後者の叫喚、夜は前者の哀哭、四六時中泣き聲は斷えない。哭を泣とする異文は恐らく非。

8　あの呪わしい四つの星に嚴しく警固される天の關門、涙をぬぐい晴ればれした顔をして、あの星の關門を手中に收められるのは、一體何時の日か。星關とは要するに「皇居の比喩」（馮浩）だろうが、故意に見馴れぬ言葉を用いて、明言するには憚られる何か——たとえば宦者四星にひしひしと圍まれる皇位——をほのめかしたとおぼしい。收はやはり收復・回收の意、その對象は徐德泓の指摘どおり星關であり、馮浩などが涕涙とするのはおかしい。

全篇を劉從諫への期待・激勵とする解釋の不安は、劉が唐王朝に仕える地方長官としての並の節度使でなく、上黨の地を世襲する事實上の獨立王國の主であることだ。宦者が前門の狼ならば、こちらは後門の虎に等しい。むしろ隱然たる一敵國というべき相手の軍隊を安易に長安に迎え入れてよいのか。若き憂國の士が當時の情勢にそれほど盲目だったとは考えにくく、そうした意味では、劉從諫を刺身のつまに、他の節度使を主役とする舊說もなかなか捨てたものではない。

（横山　弘）